Sept 189
No. 414

明治十八年初刊

每月廿五日發兌

# 女學雜誌

第四百拾四號

要目

社説
慨歎の調鑑みざる可らず

評論
教界信條論
非功名心論

隨感
一法士の夢幻
得んとする者は之を失ふ
扇の聲（四の音）

女學
繼母と繼子
女學伸張の活動機
高等女學校全盛の時代
附り宣教師派女學校
裁縫教授細目

爛煥
惡年少と家庭（櫻井鷗村）

時文
テニソンのドラ◎鼎軒の罵調◎大隈伯昔日譚◎後の三日月◎伏覧殿◎やけ火箸◎八頭の大蛇◎東亞學院講義錄◎水雷艇

片々
下田歌子女史◎野中兼至氏夫人◎近着救世軍中の女傑◎一笑の微笑◎三井高保氏女學校への義捐◎女學雜誌によりて戀す◎奥村五百子◎高等女學校の新設

明治二十八年九月二十五日發兌

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

# 第四百拾參號目次


社説
[illegible]

女學
女生の[illegible]
[illegible]

爛熳
凱旋將士[illegible]
[illegible]

隨感
[illegible]
月下に笛を聞く
[illegible]
[illegible]

新刊書
文學界、[illegible]
[illegible]

片々
女學[illegible]作者の反省　女子教育[illegible]
[illegible]
[illegible]


# 第四百拾貳號目次


社説
來るべき一大事、一大時節

評論
[illegible]
日本宗教[illegible]

女學
女子教育[illegible]の化粧
[illegible]

隨感
[illegible]

新刊書
[illegible]

爛熳
[illegible]（俳句一百六十[illegible]首）

片々
[illegible]


## 天下の仁人に敬告す

岡山孤兒院は、曩に獨立自活の方を立て、斷然仁人の義捐をすら謝絶しつゝありしに、院長石井十次君及同夫人以下四名の役員は、悲しむべし、虎列刺病に犯され、該院は今や交通遮斷の下に置かれたり。則はち、該院は已むことを得ず、素懷を破りて、暫らく天下に訴へ、急時に處するの義捐を乞はんとせり。冀ふらくは、仁人惠然として之に對え、其急を救ひ玉はんことを。而して、弊社は、取次送達の勞を欣然として執辨せん。

明治二十八年九月

女學雜誌社　白

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌

第四百拾四號

明治二十八年九月二十五日發兌

## 社説

# 慨聲の調鑑みざる可らず

古來の史論を通覧し、慨聲の叫ぶ所ろに傾聽して、靜かに今昔の進歩を比較せんとする人士は、玆に奇異なる一現象に接するなるべし。即はち、世道の退歩を慨し、人情の澆季を憤ふり、昔しは斯くあらざりきと痛歎するもの、古へより連々比々として、曾て失せず、而も甚だしく増減せざるの事實是也。蓋し、昨日は今日の昔しにして、今日は亦た來日の爲の昔しなり。故に、甚たく恨惜して切りに昔日の善美を追慕し、大ひに當世に慨して甚しく現在に失望するものに取りては、今日は即はち奈落の底の如く見ゆ可しと雖ども、奇しむべし數年、十數年、數十年の后に及べば、此の奈落の底は反つて絶高の天堂となり、人々仰慕理想して、單だ之に似んことを望むに至る。孟子曰く、一治一亂と。然らば、世は轉換改正して、時に其鬱弊を淸むるものか。左れど、治世には治世の不平あり。亂世にも亦た亂世の不平あり。不平、常に斷えず、慷慨の曾て止まざることを見て、而して此の不平慷慨なるものの大率ね常に古に贊し當世に恨むの事實を考ふる時は、抑そも人の慨聲の古來未だ曾て默止せしとあらざるを覺るべし。慨聲、代々、古に贊して今に恨み、今の古は亦た后の當世に贊せられて、其當世の彌よ當世に恨まるゝことを思はゞ、論者當に疑問すべし、人世は抑そも日々に退歩しつゝある乎、道義性情は代々に衰ろへつゝある乎と。

若し日々に退歩し、代々に衰ろへつゝありとせば、世界の運行は暗黑に向つて進むもの也。果して然らば、蒸氣電信の快速を加ふるは、即はち絶望に行くの歩みを速むるに過ぎず、學理新法の彌よ知らるゝことを増すは、人を墮落せしむるの速度を促がすに同じ。皇天明赫の下の人世の事、豈に只だ斯の如き不吉の運命のみを以て滿ちんや。



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

惟みるに、世道人情の進歩は、其の善悪の二つ乍らを同もに増すもの也。悪者の智識工夫も年と共に増し、其の便利勢力も亦た代と共に加はるべし。故に此の一方面より観察せば、悪の進行は、古来年代と共に進んで日々に其範界を擴ろむるが如くなるべし、然れども、之と拮抗闘争して敢て劣らざらんことを期し、同時に衛々努力して必らずや進向しつゝある他の光明の一方面存す。以て能く権衡を維持し、悪者の増殖を遮防することを得るもの也。此の故に、善悪の相ひ消長する関係と、其勢力、及び範界の多少とを比較するときは、古今全したる増減あるを見ず。故に、悪者の猖獗已ざるを思ふて、密かに善悪の力なきことを歎ずるものなきにあらねど、然も、悪者の勢力の「今」は「古」より増し、「後」の更に「今」よりも増すことを思ひて、而して、常に能く之を拮抗するの善者あることを考ふるときは、善者そのものゝ勢力と品格とに於ても、古来著るしき進歩を為しつゝあることを認知すべし。勇者に、敗軍の中にも尚ほ顕現すべし、況んや對部の戦ひに於てをや。假令に善者全く悪者を撲滅し了することを得ずとするも、尚ほ以て善者の威力の日々に代々に進歩しつゝあることを楽しむべき也。

二

此に於てか、慨世の代々絶えずして、而も其力の彌よ悲しく、其諸の彌よ精はしき所以を知る。蓋し慨歎すべきの事實を擧げ来れば、其事實の「古」よりも「今」に於て更に増し更に兇悪ならんとは明白なり。惟ふに、其増加と、兇悪とは、将来に於て益す甚しからん、之れ悪者其自身の進歩の彌よ甚しからんが故なり。此に於てか、慨世の代と共に痛音を増すの所以を知る。痛音を増す所以、一面に於ては、悪者の進歩を示し、他面に於ては、之に拮抗せんとする善者の勢力の将に増加せんとする激氣あることを示す。故に、痛音の彌よ高きは必らずしも憂ふべからず、但だ其の音ひとり高くして、而して之に伴随すべき實行の進歩せざるに於つて、初めて憂ふべし。之れ、對外闘争の上に於ける敗亡を来すの外なければ也。悪者は、常を隠して潜かに来る、其の来ることは緘實にして、其聞ゆることは稀なり。然るに、善者なるもの、たゞ切りに慨世を叫んで其聲を大にするも、實際に来り迎えて敢て之を防ぐことを為さずんば、即はち遂に敗亡を招くの外あるべからず。此故に、識者は慷慨の調に鑑みて、時世の善悪を卜す。もし

慷慨の聲高くして而して實行之に伴はずんば、現に慷慨を激すべき惡者の增殖ありて而も之を防遏すべき善者の實行なきとを知りて、以て世道人情の眞に退ぞきつゝあるとを覺る。斯の如くんば、慷慨あるの世は、慷慨なきの世に劣るを知るべし。慷慨の聲あるの一事、何ぞ直ちに吉兆とすべけんや。人もし單に慷慨し、徒らに古に慕ひ今に恨みて、而して、之を矯正釐革するの氣力なく、尙且つ失意絶望して、徒然たる厭世放擲の無精神に安んずるとあらば、世道人情は即はち退歩するの外なし。個人としては、如此き個人は墮落すべし、國家としては、如此き國家は滅亡すべし。此の墮落と滅亡とは、即はち殷鑑たり、刺激たるの所以、以て他の慢惰者を打擊して、世界の公道に扶益す可し。此に天の大慈を悟つて、暫らく小偶の不幸を弔す可きか。

方今、我國に聞く所ろの慨聲は夫れ何の兆ぞ、政、敎、文の三大界、到る所ろに悲憤痛恨の激調を耳にす、何んぞ其の音の凄慘なるや。之れ、其聲を以て生命とし實行とする預言者の聲なるか。もしくは、失意絶望して、たゞ疇昔に戀夢する厭世家の聲なるか。もしくは、實行の氣力なくして、橫着なる批評眼のみを備へたる嘵舌の徒の聲なるか。識者、耳を傾むけて、仔細に其調韻に聞かずんばある可らず。

嗚呼、人世に惡者ある何んの奇怪ぞ、惡者の勢力の年代と共に增す亦た何の異數ぞ。要とする所ろは、拮抗鬪爭の吾等が實行如何と云ふにあるのみ。夫れ、難に勇さみて巨敵を擇ぶは、士の素懷にあらずや。世上猶へ擊つべき惡者の勢力の日に加はるとを聞きて、而して、吾敵の戰ふに價値あり、戰かつて偉勳を奏するの望みあるとを思ふは、亦樂しからずや。吾黨素より慷慨の徒に賛す、然れども、慷慨に賛するの所以、少しく世人と異なる。

## 評論

### 敎會信條論

自から責むると嚴にして、他に求むると寛なるべしとは聞けり。未だ聞かず、自から責むるとの太はだ寛にして、他に求むるとの極めて嚴なるべしとは。異なる哉、方今自稱してヲ

ーソドックセーを誇るの人士や。

抑そも教會は、得道卒業の信徒のみを以て組織せらるべきものか、若くは、一旦これに入りたるのち更に月々日々の修養進步を遂ぐべきの所か。本來教會なるものの性質抱負を其の理想上に於て主張するに於ては、別に論あるべし。左れど、其の現在の狀態に於て之を言はば、教會に入るものゝ資格は蓋し第二類にてあるべき也。即はち、是れ每日曜日に於て說教あり、講義あり、安息日學校ありて、多種修養の方策の至つて重んぜらるゝ所以なり。

左れ共、教會は一種の學校なり。靈性の智識鍛練、此の所ろに於て遂げらる。卒業は常に將來のものなるべし、其入門に方りては蓋し初學の類のみ。之に向つて直ちに神奧玄妙の信條を翫味せしめんとするは難し。

但し、既に入門せしむと言はば、入門に方りての多少の要件なかる可らず。即はち、改悔、更生、バプテスマ、主及び基督を信ずるとなど、其の最大要件なるべし。左れど、此の要件や、將來、クリステアンとして殊勝なる發達成長を遂げ得べきの目標に對し、其發段階に達したりとの證跡あらんとを要するの至旨にて、必らずしも、クリステアンとして充分最上の卒業を爲したるとを認識せんとするの目的にはあらず。主の曰たまはく、吾を拒まざるものは、吾に來るもの也と。凡そ傳道者たり、先鋒者たらんものは、常に此の大慈悲の救濟心に則とり、何如にも入門接敎の爲の故障を少くして、而して、爾後、示教利喜の養ひを懇ろにし、入會の后ち、駸駸として道に進むの實効あらしむべき也。

然るに、玆に益もなき難解の信條を標識し、入會者は先以て此の玄奧の神學を諒解せざる可らずと規定するとあらんには何如に。或るものは、半解速了し、或るものは、朦朧曖昧し、或るものは單に點頭復誦して、譯もなき規則的の試驗に及第し、殆ど輕々しく入會するものの出來事たるのみなれども、謹愼にして責任を重んじ良心の一是一非を山嶽江海の大なるよりも尚ほ大なりとする重厚の潔士に於ては、左な輕々しく承服すること能はず。況んや、日進の科學を識り、幾多の學說を辨じ、心中既に多くの立論ある學識に於てをや。取分け其學理上に於ける異論のあらんと必せり。若しも、教會にして、智識學說を研究すべしとせば則はち止む。元來其の主要

は靈性の修養にありて存し、たとひ學說々明に於て相ひ異なるあるも、神を信じ、基督に事へ、天命を奉じ、人事を盡すの信念德行に於て相一致することを得べしとせば、則はち教會の能事正に了るべきものを、徒らに無益の門關を造り、將來多望の吉士學輩を斥ぞけ、かの輕々軟々たる人々をのみ入門せしめんとするは、恨事にあらずや。

更に若し現在の教界先輩なるものに就きて、彼等が現在、信識することを得たるクリードなるものは、抑そも幾年月の研究自得によりて之を得たるかと問へ。或るものは、二十餘年の經驗を要し、或るものは十數年の工夫を要し、尤とも短きものにても、七八年の講習を要したることを知るべし。夫れ、身を教務に托し、心習本來此邊に慣れ易きの人士が、十有餘年前后の經驗によりて初めて瞭解すべき高尙玄奧の神理を、直ちに初學入門の新信徒に向つて要求せんとす。其の不道理なること既に明白ならずや。況んや、此の流先輩諸氏自身すら、其の最初の入門に際しては、極めて笑ふべき迷信誤解によつて引入れられし自己の經驗の臆起せらる可きをや。若し自から責省せば、豁然發明する所ろ多かるべし。

吾黨が平生基督教界の講壇に疑ふ所ろのものは、其の信仰告白の餘りに深奧にして、到底、一般世人に瞭解せられざるべしと思惟することにあり。講壇々下に聞く所ろのものは、惣じて初學の徒なり。之が靈性の救ひを冀がひて、何如にもして其の瞭解せんことを望まんものは、或ひは、方便比喩を用ひ、或は、應病與藥の手段を用ひ、只管らに聽者が腑に落とさんことを旨とすべき筈なり。即はち是れ傳道の慈悲にして、說法の廣長舌、この外にある可らず。然るに、方便もしくは應病與藥と言へば、佛家の專用手段の如く見傚し、甚しきは、之を以て不正直の事の如く考ふるものあるに至りては、宗教の鍛練幼稚にして、他を救ふ信切の未だ懇篤ならざる所以、何如にも恥かはしき次第と言ふべし。若し之を目して正直と言はば、何如にも正直にして、即はち幼稚なる正直とこそ言はめ。吾黨は、基督教界の講壇の餘りに此の幼稚的正直なるを惜しむもの也。

惟ふに、講壇に於て一般の聽衆に對ひ、玄妙深奧の神理を悉皆言ひ盡さんとするは、到底出來がたきことたるのみならず、亦必ずしも爲すべきの事にあらざる也。講壇の示教は、當に

普通一般的なるべし、其の玄奥なるものに至つては、即はち個々人々的の示敎にして、正に是れ、牧師が信徒の各自銘々に施こすべきの秘密、牧師の大本領此にあつて存し、其品格眞正の優劣は、大率ね之によりて決するもの也。

以上講壇の事を申說せし所以のものは、敎會の入門、及び、入門后の修養に於ける瀬際の態、宛から今の講壇に於ける一種の誤謬に相似たるものあるを以ての故也。讀者もし兩々相對せしめて、所謂る傳道の熱悲、敎育の方法、靈界の修養などに於ける吾黨の愚見を察了せらるれば幸ひ也。

吾黨こゝを以て、敎會が言明主張すべき信條なるものゝ、極めて單純なるべきことを要求す。而して、此の信條の說明に至りては、寧ろ個々の守る所ろに放任し、敎會が主として標誌する蹤跡は、實行品德の上に存すべきことを可なりと信ず。凡そ、行ひによりて救はれずナド言へることは、常に天に對して言ふべし、敎會に於て言ふべきことにあらざる也。目に見ゆるの敎會に於ては、目に見ゆるの形に於て制裁せざる可らず。知行合一は、敎會を健全にするの秘訣なり。

扨て、此信條を單純にすべしと言へるの一事は、蓋し何人も不可とせざる可し。然れども、單純とは、何如なる程度なりやの事實に至りて、大に異論を生ずべし。吾黨も亦信ず、所謂る單純の程度は、國情時世に隨がつて變ずと。彼の新敎の如きは、舊敎に對する反抗を主として成長せり。故に、其の信條の告白、及び此の告白を講壇の上に於て悉さんとするの傾向など、總べて反抗宣言の意味ならぬはなし。此の因緣を受けて、新敎の會堂は、大率ね告白、辯證、演說の分子(即はち、攻擊、改革の分子)に富めども完熟せる宗敎、建設的の宗敎などに要とすべき禮拜の分子に至りては、自から貧しき所あり。日本從來の新敎々會も亦た此の由來によりて、不知不識の間たに誤まらるゝ所ろありたり。

否な從來の攻擊的姿勢を取りたる時世に方りては、之も亦た益する所ろありき。左れど今や、敎勢一轉し、反譯時代を過て、特發時代となり、正に新日本基督敎會を建設せんとするの現時に際しては、言明すべき信條の告白なるものゝ増減せらるべき必要は迫れり。

左れど、今も尙は攻擊的姿勢を取るべきの時世なりと言ふものあらば、之も亦た可なり。苟くも、攻擊的姿勢を取りて、

「或る物」を天下に主張言明せんとせば、應に好く、敵手の病弊を看破し、現在必らず宣言せざる可らざる大欠點を明識し、此の諸要件を旗幟に記るして、熱烈痛快なる大告白を爲さゞる可らず。此の目的の爲には、信條の告白は、如何にも明白なるべし。而して、約束は如何にも嚴明なるべし。信ずるものは、味方とし、信ぜざるものは、敵とし、堂々大決戰の態度をもて天下に打ち出でざる可らず。吾黨は信ず、斯の如き大決戰を起さゞる可らざるの機會は遠からずして來らんと。一と度び此に到らば、則はち當に斷乎たる姿勢を取るべし。

此は即はち一時なり、今は即はち他の時也とは言ふ。

他の時なる今に方りて、現に其の敎會の規約頗ぶる緩漫に、現在會員の過半は、言明したる信條を諒解もせざるの事實あるに際し、徒法を立てゝ、徒らに新來の吉士を苦しむるは、何事ぞや。夫れ、徒法は、圖鹵なるものに取りては何の雜作もなく、責任を重んずるものに取りては、良心の苦痛となる。此に於てか、吉士彌よ去りて、軟者ひとり殘留す。現在の敎會たるもの、大に猛省すべきに非ずや。

此に於てか、敎會制度の大ひに自由にせざる可らざるとを説くものあれば、直ちに其の信念に異動ありたりと速了し、風評し、輕々しく他の信仰を測度するに至る。敎界の同胞、何を以て斯の如く狹隘なるや。夫れ自から責むるは何如にも嚴なるべし、信念日夜の鍛練豈に之を輕忽にすべけんや、祈禱あり、斷食あり、苦き經驗あり、孤獨の默想あり。凡そ敎會に入りたる以來、神を信ずるの信、基督に事ふるの仕へ、日に日に溫たかく、月々に明らけく、年々に彌益さずんば、豈に敎に入りたる好道の士の面目とすべき所ろならんや。吾黨は望む、吾儕が自から責むると如此く嚴にして、而して、自から信條とする所ろのものは、彌よ複雜に、彌よ奧妙に、更に彌よ眞のヲーソドックスたるべきとを。左れど、眞乎に此の修養を實行して、自から多年の進歩を經驗したるものに在りては、敎界の段階の幾等層にして、初學入門の敢て輕々しく承認しがたきとを憶ひ起し、當初、如何にも幼稚なりける吾が、幸にして天雨天露に浴して今日あるに至りたるとを感謝し、痛める葦も折るべからず、烟れる麻も消す可らず、信切寛容にして、濃やかに勞はり、穩やかに遇するにあらざれば、所詮、敎界進歩の遂げがたきとを認識し、即はち、入門者に



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

待する規律の如何にも寛大ならざる可らざるを知るなるべし。まさに、是れ人に責むる寛にして、其の叙むろに發達するを樂しみ、一日の長たる吾が經驗を傾けて、以て之が助長を計らんとを希圖するの所以にあらずや。

然るに奇しきは、世上一個の先輩なり。彼等は、其の多年の勉學讀書によりて得たる信條の解釋を、直ちに移して初學者に諒解せしむるとを得べしとする乎。もし得べくんば、其の淺薄なると知るべく、又其の單に書籍上の智識たるを知るべし。凡そ宗教的傳道の最后は、基督教にありても、依然として亦た以心傳心なり。所謂る拈華微笑の法味は、豈に必らずしも、佛教にのみ限らんや。主の曰たまはく、此は爾曹にかくされたりと。后に顔を合せて相見るが如けんと。傳道の秘義、こゝに在す。故に、使徒は曰く、吾が得たるものを汝等に與ふと。此の、得たる所のもの、即はち言語道斷の妙味なり。之を傳ふるは、當に心を以て心に移すべし。豈に語數の上に於て、もしくは、入門の入口に於て傳ふべきものならんや。然るに一種の先輩は、直ちに之を以て一般普通者に要求せんとし、此の要求の行はる可らざるとを説くものあれば、即はち、信仰の冷たるものとなす。嗚呼、信仰を得るも失ふも、如此く無雑作なりとするとの淺ましさよ。

故に、吾儕は信ず、教會の制度は、大ひに改ためざる可らずと。傳道士、先輩信徒の自から責むるとは、彌よ嚴なるべくして、他に求むるとを大ひに寛にせざる可らずと。而して最后に烈告す、今の如き舊約圍内、徒法明存の教會に相應せん爲には、信條の告白を頗ぶる自由にせざる可らず、若し信條を其の意義通りに嚴明にせんと欲せば、先づ大に教會員を淘汰し、明らかに旗幟を樹て、率先、攻擊的態度を取りて自から之を實行せざる可らずと。即はち、教會改革の責あるものは先づかの信條論者の上に存す。別に大に待つものゝ如きに至りては、暫らく現在の陋習徒法を見すぐしにして、其の實際相應に、信條告白の極めて自由なるべきとを主張するの外なき也。

〰〰〰〰〰〰〰〰

うらやまし同じ浮世にめぐれども
　月は雲居の上を行くかな。
もろともに影かたむきて眠むれば
　月もあはれと我を見るらん。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 非功名心論

流水庵

風に廻はる風車は、常に同一の圓を以て廻轉するもの也。戀愛と功名心と、人心を鼓動する今猶ほ古の如きなり。徒に何れを重しとし、何れを輕しとするの論、既に其の根本を謬る。知らずや人は水と空氣に由て生活するものなるを、然らば二者未だ漫に輕重す可らざる也。

世上一種の論者あり。切りに功名心を揚げて戀愛を抑ゆ、曰く人は戀愛に死して功名に生くと。着眼ま丶奇警、吾人と雖も或意味に於て此を是とす。然れども未だ俄に琴を鼓して調を合する能はざるものあり、何となれば彼等は山を畜て水を畜く勿れと敎ゆるものなればなり。

吾人の信ずる處を以てすれば、人をして其の願欲に向て裸躰の醜を恥ぢざらしむるは、所謂彼の功名論者なり。功名主義の人はパンを裂て食ふとを敎へて、手を洗ふとを敎へざるなり、路頭に横はるの岩螺を排す可きを敎へて、優に泉み來る美泉を掬するとを敎へざるなり。人何ぞ始終の勞力に堪へんや。思ふに人は其の自然の性情に在て安慰を冀ふものなり。

彼れ十里の路を行くに一夕の休息を要す、彼れその欲する處を得んと欲す、必ず美妙の快感を要す。人は何の爲に功名心に依て、其の心臟を鼓動せざる可らざるか、是れ宜く功名主義者の解釋す可き問題に屬す。今ま夫れ功名の爲に功名を欲すと云ふ、義理頗る嫌然たり。功名に成功すると失敗すると、何の趣味かあり、何の苦痛かあらん、畢竟するに功名心は方便にして目的に非ざる也。

所謂功名心とは屍の在る處に集る蛆を云ふ。彼れ營々として朝に一塊の屍を抱けども、夕に他の欲望を追て去る。功名心には些子兒の餘裕なし、一粉の滿足素よりあるなし。常に走り常に捕へんと欲す、寧ろ路頭に斃れて餓腸を晒さらんや。此れ恐くは極端の論ならん、然れども單獨なる功名心の人を毒する實に恐るべきものあり。功名の動機をして、獨りその行くがま丶に行かしむるは、猶ほ瞽者を原野に放て、汝ぢ獨り安かに行く可き處に行けよと命ずるが如き也。如何なる人物に在ても、功名の動機は盲なり。欲望餘りありて眼閉ぢたる猛鷙の如きなり。彼れ徧にこれに依て動く、此れ寧ろ永遠の苦痛を味ふものに非ずや。



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

近く此を人體に觀察せよ。物を握るに一双の手あり、道を歩むに一對の脚あり、物を見るに二個の眼球あり、以て人をして生活に不便なからしむ。一眼既に盲す不便何ぞ堪へん、一手既に切斷せらる何ぞ不自由に堪へんや。則ち知る可し、人は到底一手片目なる能はざる也。

彼の功名心を揭げて戀愛を抑ゆるもの、吾人頗る其の偏狂なるを憫まずんば非す。吾人は敢て功名心と戀愛と、何れを重しとすべきかを知らず、然れども無責任の空論を爲さゝるが爲に、此に聊か所見を開陳す可きなり。

夫れ人は美を成ずるに最も親切なるもの也。美を愛するの念は、此の可憐なる地上の小物をして、天使の群に立つを得せしむ。彼れ星光を見る、則ち天地の讃美を想ひ、彼れ美しき小女を見る、則ち人心の秘密に打たる、此に彼が心靈歌ひ、此に彼が血液舞ふ。悠然として宇宙と同化し、又た俗念の胸中を煩すあるなし。斯くの如きは現實の生活に在て、人をして動物以上に超越せしむるの理想に非るか。吾人は此を名けて戀愛と云ふ。

戀愛は實に平和の歌を謡ひつゝ、影涼き林間を縫ふ美しき淡流なり。玲瓏として青空の容を湛へ、澄然として蘭花の顔を映つす。何の邪氣もなく何の懸念もなきが如し。然れども悲む可し、人は遂に永く此の面白き清流に從て逍遙する能はざる也。愛らしき淡流が木の葉を浮め、青苔に接吻しつゝ過ぎゆく間に、いつしかに其の行路に横りて、否な汝は此處を通過す可らずと妨ぐるの險岩あり。吾人は此を名けて功名心と云ふ。水流れざる可らず、岩柱がんと欲す、則ち岩角砕て水花飛ぶ。此を人生の活趣と曰はんは、餘りに苦痛に過ぎたり。吾人は人類の生活に於て此の衝突あるを悲む。

然れども平行線に非ざる二個の線は遂に横斷するものなり。然らば戀愛と功名心と又た衝突せざるを得ざる也。戀愛は汝が美しき歌を謡へと私語き、功名心は汝ち走て彼處の木の實を食へと叫ぶ、此の二個の反對せる動機に觸るゝ時、人は猶ほ孝子が二親に奉仕するに當て、一は餘を食はんと欲し、一は汁る食はんと欲するが如く、吾人は此の間の秘力に至ては、始めより何れを去て何れに就けよと云ふの、餘りに小兒らしきを憫まざるを得ざる也。然れども人は二人の主に仕ふる能はす、英傑猶ほ此に至て窮す、此に腸を断つの刃あり、此



Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

に胸を碎くの秘あり。所謂個人の修業とは、功名心と戀愛とが主位を爭ふの苦痛に過ぎざる也。

功名主義論者則ち此に至て、功名心の力を説く甚だ得意なり。曰く英傑とは此の重荷の苦痛に在て、幻夢を去て實際に就きたるもの、換言すれば誘惑を去て希望に就きたるものと。論理大抵此に出でず、然かも吾人は悉く首肯する能はざるものあり。功名心を希望の力と云ふ可ならん、人を鼓勵するの動機と云ふ可ならん。戀愛を幻夢若くは誘惑の如く解釋するものあらば、吾人も又た美神の爲に魔を拂ふの鉾を執るを辭する能はじ。

戀愛と功名心と、此を心理的に論ずれば、二者が人心自然の性情より泉み來るに於ては同一なり。然れども功名心は甚だ無造作に人を刺衝す、元來裸躰なり。戀愛は然らず人を刺衝するや甚だ奥床かし、元來美的なり。功名心は汝ち何ぞ此を取らざると迫る、其の間寸毫の容捨あるなし。戀愛は汝ち此を美なりとするか、されど汝は必ずしも此を取るを用ひずと教ゆ。功名心は實利的なり、戀愛は理想的なり。功名心は之を得ざれば滿足せず、戀愛は之を得るも滿足し、得ざるも滿足せんと欲す。則ち人を鼓吹するに當て、甚しき高下の差あるなり。

功名心の刺衝は錐を以て腿を刺すが如し、苦痛常に伴ふ。戀愛の刺衝は夢に甘露を掬するが如し、快感常に伴ふ。而して其のインスピレションも又た從て高尚なり、從て眞實なり。隴を得て蜀を望むと云ふが如きは、斷じて戀愛の聖境に許さゞる處、然かも是れが爲に決して小安に滿足すること非ざる也。

これ其の故何ぞや。元來功名心の刺衝は萬有を自己の掌中に專握せんと欲するものにして、到底或定度に至て失望せざるを得ざる也。戀愛の刺衝は然らず、自己を大なる愛の中に投ぜんと欲す、情懷限りなく盡きる時なきなり。功名心は我をして人類と戰はしめ、同胞と戰はしめ、我れ我れに向つて戰を挑ましめ、雪霜に對し、江流に對し、木石に對して宣戰せしめんと欲す。戀愛は然らず、美人を愛し、英雄を愛し、我を舉て幽花に對し、鳥語に對し、凡て其の愛するものに向て、滿腔の同情を湛へしめんと欲す。一は狹き自己の中に、限りなき大を得んと欲し、一は大なる愛の中に、小さき自己





Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

を同化せしめんと欲す。一は三角塔を倒に建てんとし、一は此を順に建てんとするに似たり。其の労に堪ゆるの精力を鼓吹する大小強弱素より云ふまでもなきなり、一は自己小にして、一は世界大なるに非ずや。

然ども誤解する勿れ、吾人の所謂自己小とは、自己の小を以て限なき渇仰に向て、精力を用ゆる者にして、所謂世界大とは限りなき世界大の愛の力を、眞實なる目的に向て集注するを云ふ。功名心は精神を以て世界を照らさんと試みるもの、戀愛は太陽の光熱を硝子盤に集めて物を焼かんとするもの、此れ甚しき誤謬の言なるが如しと雖、吾人は此れが必しも心理上の空論に非るを信ぜんと欲す　敢て奇抗自ら喜ぶ者に非る也。請ふ吾人をして一歩を轉ぜしめよ。以上はこれ戀愛と功名心とが人を鼓吹するの趣きを論じたるもの、未だ戀愛と功名心とが、その根底に於て超ゆ可らざる性質の差等あるを曰はざるなり。吾人が功名心を非とし、戀愛を徳とする所以のもの、豈に多少の理由なしとせんや。

それ人は元來自己を立つるに功名心を重んぜんと欲す。何となれば戀愛は現在に於て彼に加ふるもの、甚だ寂寞たるものある如くなればなり。此に於て世上空榮を慕ふの徒、則ち戀愛の聖殿を棄てゝ、功名の修羅に立つ、而して唯だ此の一の動機に因て、苦痛を謳歌し、失敗を歡迎す、眞に英雄らしきなり。眞に強き戰を戰ふ勇士の如きなり。吾人を以て見れば甚だ然らざるものあり。何となれば彼はその希望に心酔して願欲を成功せんと欲するに、自己中心的にして、世界は自己の爲に備へられたる如く思意すればなり。縦令社會の爲に自愛すと云ふと雖も、所謂社會の爲めなる論理は、單なる功名心に在ては甚だ微弱なり、甚だいはれなき也。天神を敬し人世を愛すなる高尚なる動機は、吾人は此を功名心に歸する能はじ。翻て戀愛を想ふ、甚だ清浄なり、甚だ高尚なり。戀愛は己れの爲に人を愛するよりも、人の爲に己れを犠牲するを辭せざる也。戀愛の徳とする處は献身にあり。水火踏む可し。断崖攀づ可し。戀愛の興北の赴く處、悲哀に快感あり、苦痛に甘味あり、断腸に眞實なる路あり。其の主とする處献身にあればなり、献身の泉源に一點の塵を交へんや。

所謂人世の目的と職分とは何ぞや、自己の呼吸する社會を愛護するにあり。而して社會を愛護するとは、則ち献身すると

に非ずや。人は啻に自己のみの爲に生活するものに非ず。世界の大なる目的は自愛よりも他愛にあり。功名心と戀愛と僅に自己的ならしめば、その價値何くにかある。若し斯くの如きの社會あらんか、人は憐れなる贄を覘ふ凄まじき眼したる猛虎と成り了せんのみ。一本の草も一莖の花もそのまゝにてあるまじき也。人は實に先天的に社會的なり。詩歌も宗教も美術も科學も、個人が社會を愛するの餘、その貴き腦血を消耗したる結果に非るなし、故に戀愛と曰ひ功名と云ふ、又た相互的を意味するに非ずや。我れ此を欲すと云ふは、我れ此を彼れの爲に欲すとの意味ならざる可らず、此に於て戀愛と功名心と何れを重しとするの論は　結局獻身の眞實に歸せざるを得ざる也。

吾人は故に解釋するを要す、功名心と戀愛と何れか獻身の眞實ありやと。立身の方便は知らず、愛世の大道に於て、此一問は吾人をして二者を輕重するの理由を語り得可しと信ず。

世間由來功名心と獻身の精神とを誤解するもの多し、然かも常に千里の差なくんば非ず。彼のダンテが軀體痩衰して猶ほ能く神曲に筆を絶たざりしは何ぞ。ベトウベンが聾して猶ほ能く音律を窮むるに辭せざりしは何ぞ。フロレンスの榮華よりも、可憐なる處女の幻像はダンテをして沈鬱幽遠の理想を追はしめ、世上の喝采よりも音樂其物を愛するの精神は、ベトウベンをして鬼神深哭するの妙譜を出さしめたりと知らずや。ニユトンが理學の精究に餘念なく、誤て袖時計を煮たる時。ワツトが病軀猶ほ懸鑵を擁して蒸氣を眺めたる時。ラツブピアが椅子を燒き、机を焚きて煤爐に粘土を弄したる時。吾人はその天命を重んずるの精神頗る獻身的にして、一點功名の念を付くるなく、寧ろ處女が其の戀人を愛するが如き強き愛着を見るなり。人其の事業を愛する、戀人を愛するが如くならずんば、何ぞ成功するを得んや。漫に我はこの事業を成功せんと云ふも、吾人は單なる功名心が人を鼓吹するの力甚だ薄弱なるを感ずるなり。知る可し學者の學を愛する、英雄の劔を愛する、詩人の詩を愛する、實に戀人が其の戀人を愛するが如きものあるを。吾人は此を高尙なる戀愛的獻身と云ふ。功名心の如き殆んど一毫も與る處なき也。

人或は曰はん、我れの大なるは則ち社會の大なる以所にして、我が功名心を達するは畢竟社會を救護する以所に非ずやと。

然れども獨り聳へ立てる山は、徒にその地盤を盗むのみ、群山彼と列ならずすば孤獨なるなり。他愛なき功名心は夫れ斯くの如きか。思ふに自己の大にして社會を大にすとは、献身的にして始めて慥實なりと云ふ可し。人或は此を稱して高尚なる功名心と呼ばんかなれども、吾人は功名心に高尚の二字を冠せんよりは、直に此を戀愛の精神と呼ばんと欲す。故に吾人の功名心を解する、世上一種の論者の如く甚だ卑きを置くものに非ざる也

今や世上有爲の天才が、各其の使命を背負ふて立つに當り、此を鼓吹するに功名心を以てし、戀愛を其の土足に蹂躙せんと試みる者、有力の論者にして屢々是れあり　吾人竊に怪訝に苦む。想ふに今日の天才は功名心に於て既に滿てり、多血なる彼が心臟は餘りに之が爲に鼓動するに過ぎたり　彼の朝に曉星を迎て夕に明月を送ふるに急はしきもの、ギッボンが十五年にして羅馬衰亡史を著し、ミルトンが盲して失樂園を歌へるの志操なきは何ぞや。功名心の鼓動甚だ敏鋭にして、其の足踏み調合に輕ければなり。其希望の容大なるに過ぎて、握る處のもの、眞實ならざれが也。所謂一事に凝て一功を忘却するの赤誠は、實に戀人が相愛すると同一の精神より來たる。所謂今日の天才は戀愛の志操薄弱なるが故に雄篇大作なき也。則ち非功名心を論ず。

# 隨感

## 〇一法士の夢幻

願ふらくは、歸ゆるしを蒙むりて直接傳道の事に從はん哉。一と度此の理屈を措かりては、實施の趣き自からにして變ずべし。蓋し、其の大道に衝じて而して吾が作ふべきの方に適せしむべきもの歟。吾が望む所のは、一庵をしつらひ、同人の給與せらるゝまゝにて生存せん、吾が爲す所は、說弁と、祈禱と、直接傳道との外に出でざる可ければ也。左れど、吾れは亦た乞食托鉢の志しを所勝なりとす、これも亦た隱かはん。一般の說教は、常に大衆に就てすべし、講壇に立ち、會衆に臨んで、秘密なる神學を說かんとするは、傳道の要旨にあらず。傳道の主とすべきは、個人的對話的にあり、所謂る

入室參禪の態、まことに其道を得たり。同人なるもの只だ大躰に就て一致すれば、則ち可なり。吾は、神を信じ、基督に事ふ、の二義を以て盡せりと信ず。神は即はち何如んの御性質、基督は即はち何如なる御方とは、人々多年の嚴そかなる經驗より覺知せらる、即はち是れ傳道者が個人的對話的に說示すべきの所ろ、吾敎の入室參禪なるものは、此の經驗を養ふの秘宮なり。當に斯の如くして、人々個々に相違し、大小權輿、序々段々の階級あるべし。安くんぞ、一紙十則の信條を以て同齊に律することを得べきものならんや。吾は、禮拜を尊ぶ。其殿堂は、極めて莊嚴なるべし。所云る莊嚴とは、天主堂の如く、寺院の如くなるを好まず、吾は寧ろ、神社の如くならんを擇ぶ。質素、淸潔、森嚴、莊大にして、樹木しげり、淸風音しづけく、あたり神々しくして、何物のおわしますやと淚こぼるる忝けなきの躰を戀ふ。社堂何ものをも置かじ、但だ寶劍と、明鏡と、圓滿の玉とを供えん。同人、玆に禮拜し、各自をして直ちに天の階に登らしめん。同人の制裁は實行にあり、實行の標準は普通の道德にあり。口にせる信條と、知識せる神學などを以て、人を上下內外することは、



尤とも不可なりとせん。廉恥、節義を以て相約し、社會の万業に改革淸潔の空氣を鼓吹し、同人各自の事業は間接傳道にして、即ちこれ一の傳道なりと確信することを明らかにせん。

## ○得んとする者は之を失ふ

生命を得んとするものは之を失ひ、生命を失ふものは之を得と、是れ此れ、人生の秘義、信念の中樞なり。善く兵を知るものは、逆櫓を作らず、水を背にして戰かひ、人を以て城となす。先づ死する即はち活くるの道、活路は之を死中に求む べきのみ。劍道の秘傳に言へらく、身を棄ててこそ浮む瀨はあれと。經濟の士敎ゆらく、與えざれば取らず、損せざれば利せずと。皆な同一の道を說く也。故に、艱難には欣喜を爲す。艱難は是れ大刺激、割つて玉を露はすの勢力なるが故なり。貧するときは鈍し、窮するときは惑ふ、失意の人は即はち馬鹿らしげに見ゆるは、人の常態なれども、困苦するが故に彌よ勇み、詮方つくるが故に光明を望み、泰然逆境に安處して、莞爾として行途を發見するの雅量堅信なきものは、平凡

の徒なり、天安くんぞ之に大任を托せんや。先づ形骸を殺し、更に浮塵淀濁の名利心を殺し、人界に纒縛さるゝの迷ひを殺し、断然此に死して彼に生き、以て天賦一身の大極致に和合するにあらざれば、天父は必らずや、吾を目して真なりと為し玉はじ。見よ、一粒の麥すら、先づ死せざれば、生きざるに非ずや。之を見んや、生命の生命たる霊に於て活きんとするをや。一死復活絶后蘇生の聖悟は、此の大決心より来る。

## ○扇の聲

之を開けば炎帝の如く、之を閉れば鋭に似たり。硬骨、各々貫ぬきて而も一標に集まる。開けば清風を送り、静まれば塵埃を正す。實に吾國の寶なれども、敢て字を書けよと求めらるゝ知友ありけり。則はち、一々思ふ所ろを筆して贈す、試ろみに其三四を録して紀念とせんか。

### ○其　一

藤樹のかげに報徳の道をおもひ、羽陽白河のはてに友を訪はん人は誰ぞ、世は流水にあくがれ、文士は浮たる雲をいのちとす、別に大成を期して心を反省にひそめ、静かに美を胸底にたくはへて、濃やかに山河逍遥の楽を練る、當世この志あるものは誰ぞ、○中門から天地あり、水清くして流を恵む、點々の滴瀝より徹し、久しふして溶々洪々たらんの日望ましき哉。白帆海洋に浮かれて、あまたゝび彼の源頭に向つて想ふ、同泉の流、それ何れの日か來り會すると。

### ○其　二

蝶の飛ぶに見とれ、蟲の吟ずるに傾むけば、既に我なし、花にほゝえみ、露をひろへば、亦我なし。秋の夕ぐれは黙すれども語らざるにあらず、落片は音せずと雖ども限りなきの辯あり、既に身を獻じて人の為に善を為さば、こゝに美の羽衣の翩翻たるを見、瑞々しきねいろの響くを聴かずや。勇士何処に生をもとめ、哲人いづこに理わりを探ぐる、見よ路傍の小草細花に天地あり、脚下のながれ、さゝれいしも説法す。吁、美、何んぞ必らずしも之を遠きに求めんや。

### ○其　三

雨は汗の如し、露は涙に似たり、日輪隈なく温ため、星辰深更に燈し火を照らす、天の万象を子とするや、日夜慈育せざるとなし、而して天言はず、四時語らず、人知らず、世傳ふると稀れなり、但だ只だ罵るものゝ聲は風に沒し、唾するものの唾は面上に落つる耳、夫れ大に默するものは大に語る所あり、世に友なきものは、別に慰さむる所あり、人寢ねて星燦めき、則ち見る所の眼あり、人聲消え、虫草露に吟じて、初めて語る所の口あり、何ぞ直ちに人に求めん、たゞ人に寄せんのみ、惟ふ茲に〇〇只管らに赤誠を事物に披瀝すれども、事物容易く感ぜず、安んぞ人をや、更に人の冷眼者をや、左れど見よ、天何の故に慈しみ、天何の故に育くむ、天何の求むる所かあらん、已を得ざるのみ、與へざれば裂けん、寄せざれば破れん、全心滿腑に鬱積する所のもの、之を產せずして奈何んせんや。

## ○其　四

氣六合に滿るが故に天地間の物一些と雖ども輕んぜず、志博愛に涉るが故に四海の内何人と雖ども疎まず、父母は地上の造物主、一族は同胞中の肉親なり、敬愛更に至る。大隠は市に隠れ、宇宙は算數に随ふ、商界の空氣安んぞ清澄せずと言はん。激氣は僻、嬌語は偏、肉力は野、圓滿の人之を取らず朝には庫中密室の裏、清念沈思、夕には店頭簿冊の下、忙々役々、而して規律整然仁思綽々たるものは、蓋し天地の人歟。君見ずや、世上何者か是れ大人なる、深溪細流の頭、鬱叢の下に野花獨り笑ふ、一生聞えずして而して稟質を天に向て發揮するもの其人に非ずや。輿論は風に似、人許は浮草の如し、有限具形の短世界は其肉眼を開て人の大小を正視すると能はず、請ふ君と共に長遠なる天の大靈の啟前に立ん。

---

女學雜誌第四百十三號を讀むに、禪の流行を論ずの一文、大に可。禪とは靜慮を云ふ、靜慮を害有りと杞憂するものありとせば、笑ふ可きに非ずや、國民中の一二節、例により、情致纏綿三誦倦む莫からしむ。文の人を移す、亦此の如きか。(九月四日の「中國」新聞)。





Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 女學

## 繼母と繼子　其二

然らば若し幸にして、姑、小姑、義理の姉妹などゝいふ五月蠅きものゝ最初より無き場合は如何といふに、此場合にても何故敵役はあるなり、それ女はいかなる素直の人にても、賢女と評せらるゝ人の外は、門前の稽古友達の中とか、近所合壁の中とか、又は一族中に、互に陰で惡く言ひ合ふ敵の一人や二人は必ずあるものにて、其人達が主なる敵役をつとめ、お隣家の内儀さんお向家のお嫁さんなどゝ、他人の月旦評を樂みにして居るかとも思はるゝ人達が、これに應援して、繼母の感情を害せしむるなり。尤も其れ等の人達とて、別に「彼奴の感情を害してやらふ」などいふ惡氣ありてする事にあらず。只前者は話題の惡口が言ひたく、後者は世間の噂がしたいといふ」丈の事なれど、只それ丈が隨分恐しき意外の害毒を醸すものなり。ア、龍門よりも風浪荒き世とは此事なるか、と云ふ少しくこゝにこれを誡かしめよ。

其主なる敵役の人達の家へ繼子が遊びに行く事あらば、只何の氣なしに「坊つちやん、今度の母ちやんは優しくして呉れますか、先の母ちやんと誰か好うございますか、」などゝ問ひかける事もあるべし、かゝる時其兒が「ア、優しくして呉れるの、先の母ちやんも好いけれど今度の母ちやんも好いの」と常に答ふるならば事は起らねど、子供の事とて、御褒美など貰ひし當坐などは兎も角、叱られし當坐等には必ず「今度の母ちやんは坊を叱るからいけないの」などゝ何の思慮もなく答ふる事もあるべし、そうすると「叱るつて坊が何うもしないのに叱るものかね、何か惡い事をしたんでしやう、エ、、坊の何うもしないのに、オヤ／＼そう、それで叱るの、エ、、それから何う此處を打つたつて、コーンと、オヤ／＼そう、それから何うしたの、エ、それからツそれからツ、」と根掘り葉掘り問ひたづね、側に誰か人の居合さば、直其人に向ひ「某さん、本統に此兒は可愛相なんですよ、先達てもね、妾が用があつて此兒の家へ行つた時もね、コレ／＼なんですよ」と些細の事を大く言ひ立て「幾等何だつて、何も彼んなにしなくつても宜

さそうなもんじやありませんか、オヤ坊は袂を綻ばして、何故母ちやんに縫つてもらはないの、エヽ、叱られるから隱してるつてッあれ御覽なさい着物の綻びも縫つて得もらはんのですもの、可愛相じやありませんか、ヤレ〳〵妾が縫つて上げましようねえ、アヽ妾なんぞの子は何んな事があつたつて繼子なんぞにするもんじやない」といひながら我子の方に向ひ「坊は幸に母ちやんが、斯うして壯健で居るからこそ、先刻の樣に駄々も揑ねられるんだけれど、若し母ちやんが無くなつて、外の母ちやんが來でもしたら何うするえ」などゝ別に甚しき惡氣は無くとも、淺薄な心より、他人の惡い所ばかりへ目をつけて置いて、天晴れ内情知りのつもりで、無思慮の毒舌を弄する事などあるものなり。それを聞く子供は、別にこれといふて心に感ずる所も無けれど、繼母といふこと位は覺え込み「今度の母ちやんはいけないの、繼母だから」などゝ何の意味もなく、覺えた通りの事を口走る事もあるべし、そうするとそれを聞く人の中には隨分好奇きなる人もありて、根掘り葉掘り繼母の平生の仕打を尋ぬる事もあるべし。而して無邪氣の小兒は正直に有躰の事を話す。聞く人それを言ふた通りに聽き、正當に解釋するならば宜けれど。この樣な事を問ふ人に限りて、繼母だから、何んな事をして居るか知れない、問ふたら好い談話の種が出るかも知れない、抔といふ野心あるものなれば必ず邪に聽とり、邪に推して、直それを八方で浮世話にするものなり。而してこの浮世話が、遂に繼母の耳に入らずに濟まば宜けれど、何故か女の仲間には斯の樣な事の聞え易きものにて、その又た聞えたるを女の常とて輪をかけて一層仰山に聽とり「オノレ子供の癖に、有る事無い事八方へ流布まはる」と腹を立てゝは、其子の少々小臉憎く見え出すも、根が他人なれば、强ち無理とはいふ可からず。かゝる事にて狹い胸が燃え立つて居る時などに、其兒がそれとも知らず、甘たれたる聲にて、小使錢をねだる如き事などあらば、益々小面憎くて、心では例の通り氣嫌よくする氣でも、眼が承知せず、グッと睨みつける如き事もあるべし。是の如く心の底から怒ると、只叱るとは自ら氣合の違ふものにて、鳥獸さへ只威嚇の爲めに手を擧げ聲を立つるには落着きはらつてビクともせざれど、若し一點眞實の害心胸中に萠さば、其氣先づ顯はれて、未手を動かさゝるに、早

くも逃げ去るが如く、子供にても彼の恐しき顔付を見ては其實恐懼れて辟易むものなり。是の如き事度重りては追々前の母の事を思ひ出し、前の母に對しては善き所のみを見、今の母に對しては惡しき所のみを見て、これを比較しこれまでは何の氣なしに「今の母ちやんは恐い」と言ひ居りし言葉も其實から言ふ樣にもなるは、取り逃がしたる魚に小なるはなく、拾ひ損たる球に無瑕なるはなきと一般、小兒の情に於ても免る可らざる通弊なり。而して其上に彼の敵役の人達が無思慮にも、イヤ此兒は可愛相だとの、繼母は恐はいはの、といらぬ事を耳に入れるなり。そうすると小兒は存外智慧のあるものにて、繼母といふものは其んなに恐はいものか、成程そうでもあらう、先の母ちやんは斯うもして與れたけれど、今の母ちやんはしてくれない」などゝ思ひ出し、後には心が捩縮けて碌に我儘も得言はず、欲しいと思ふものも「あれ母ちやんに貰つて」と却つて父親にせがむ樣にもなる事あるなり。かく天眞爛漫の愛嬌失せて來ては、繼母も亦益々可愛がらぬ樣になるは是非も無き事なり。

既に母子の間にこの樣な芽が生へて來ては、段々それに葉が出來、枝が出來、遂には花までも咲くべき道理なり。況んや其肥料ともなるべきもの、其周圍に充滿せるに於てをや、下婢の如きは其一例なり。下婢といふもの、下婢根性ともいふべき一種卑劣の根性ありて、一家の内に仲善からぬものありと思はゞ、チツと其勢力を見較べ、双方さして優劣なしと思はゞ、孰へ行つても都合よき樣に言ひなし、若し一方強しと思はゞ、其強き方へ行きて弱い方が斯ういふたとか、彼樣したとか告口するものなり。そは別に其仲を裂かんと思ふ程の悪心よりする事にあらず、只御機嫌取りの追從なれども、隨分甚しき害をなすものなり。繼母と繼子の間に於ても亦其通りにて既に繼母に於て然程繼子を愛せずなれりと見るときは、彼の敵役の人達の家などにて、繼子が言ひしこと為せし事一々告口して忠義顏をなし、以て其感情を害するものなり。而して、又繼子に對しては怠惰根性より、公然これを輕蔑し、用を命ぜられても、これを等閑に附して、ハイ／＼と命を奉ぜず、オノレ横着なと憤怒りつけても、笑つて居て取り合はぬ事もあるべし。子供とて存外意氣地あるものなれば、下女に斯く輕蔑せられては、決して平氣で居るものにあらず、ロ



Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

惜しさにこれを母親に訴へても、碌に取り上げては呉れず、自身一ヶの力にては、勿論いかんともなしがたく、「ア、前の母樣が生きて居られたら」と益々前の母を慕ひ、今の母を頼りなく思ひ、後には叱られては怨み優しく言はれても底氣味惡るがり、「繼母といふものは恐はいもの」といふ、彼の敵役の人達の言と、愈々益々信用し、甚しきに至りては、優しく意見をせられても、早叱られた事と悲しがり、其處へ偶然父親などの入り來るを見ては、さも〱悲しげに泣き縋るが如きもあり。さればとて問ひもせぬに「妾は何うもしたのではございません」と分疏もならず、廻氣深き女の胸には隨分苦しき事もあるは、姑ある場合に於て述べたるが如し。

凡そ小兒は其母親に叱られても、打たれても、只悲しがるのみにて、決して怨むものにあらず。然るに前述の如く、怨みはじむるまでに他人根性となりては、繼母の方でも自然に他人根性となり了るは、當世一般の婦女子には免れざる所なり。尤も一方は小兒、一方は大人なれば、其責任は勿論繼母の方にあれども、奈何せん愛神已に去らせ玉ひぬれば、心では他人根性を出すまじとつとむるとも、心の底が承諾せぬなり。



しかるを世間への外飾で無理に可愛がらんとしても、色々の落度がありて、偖々人から好く言はれず、好く言はれねば矢張り其感情を害して、ツマリは却つて其兒が憎くゝなるのみ。例へば、頑是なき小兒が他家で他家の子の持つて居る物を欲しがるが如き事でもあると、彼の敵役の人達は早邪推して、「平生不自由がさせてあるからだ」と一人で言へば、又一人「マア可愛相に」と何か與へし事など、聞えては、繼母何とて嬉しかるべき「エ、此兒が意地汚いからだ、平生喰べさせるものは喰べさせてある、玩具だつて彼家の兒なんぞよりは充分にあてがつてある、ヘン他家の兒が何うであらうといらぬ御世話さ、他人の事より自分の頭の蠅を追ふが宜い、彼の歳をして川崎屋が何うだとか、高島屋が斯うだとの、聞かれた醜態か」と聞えよがしをいへば、一方も亦默つては居らず」「オ、怖や〱、可愛相と思へばこそ與つたものを、禮も言はずに彼樣だ、兎角身に弱味があると、氣が廻はるものさ、と井端などの高談話。あれやこれやで腹が立つて〱、氣がムシヤクシヤとして居る時などに、其兒が何か惡戯でもするを見ては「あゝだもの、妾が默つて居られうか、それでも繼

子だからと思つて心配もして居るに」と八方へ壁訴訟。よしや極々柔順なる女でも、髪結女などの讒言につられては、ツイ／＼逆上も出るなり。そうすると軽薄なる結髪つれの常として、直それを八方へ流布てまはる歟でなくともツイ坐興に八方で喋々するものなり。而してそれが彼の主なる敵役などの耳に入れば「オホヽヽマア忿々しい、能くそんな事が言へた事よ、それ程に心配をして居るのに、子供の性根があんなに僻むものかね」などゝ言ひし事が、直又一種の電話で継母に聞えては「エヽ腹の立つ、本統に此兒は仕様がない」と其子をまでも邪魔にするに至る者なり。既に斯迄に愛情を失ふて來てより後の事は、前項已に述たれば、こゝにはこれを略す。

ア、是の如く冷酷、陰言、不和、無情、憎悪、無思慮、等の間に生長して、情の真味を解する能はざる小兒の、能く何の徳性をか養ひ得んや。情の真味を解する能はざるよりは、無情、残忍、となり、辛苦よりは卑劣となり、憎悪せらるゝよりは猜忌となり、無情、残忍、卑劣、猜忌よりは陰険となり、其外有りとあらゆる悪徳を養成する外なきなり。而して善悪ともに染まり易き小兒の内に養ひし性質は、白地に染まりし色の脱け離きが如く、生涯變ずる事難きものなれば、其行末こそ思ひやらるれ。彼の残忍酷薄にして、「彼れでも血が通ふて居るか」と思はるゝ高利貸の如きものは、多くは継子又は継子に似たる境遇に成長したる者と知るべし。若し不幸にして其天性頗る高尚にして、容易に彼の悪徳に染まらざる人あらば、其人は憂鬱性にして徒に浮世を果敢なむ不幸者となり終るなり、豈に悲しからずや。

斯る事尚忍ぶ可しとするも、時としては継母の為に責て／＼責殺さるゝ者さへあるに至ては、實に悲嘆す可きの極と謂可し。而して其責殺す人も皮相より見れば随分悪む可きが如くなれども、之を普通の人間として深く其事情を察せば、強ち悪む可きにあらざるのみならず、却つて涙こぼるゝなり。何となれば此人をして若し継子を養はざらしめば、普通の人としては完全なる立派な人物にて生涯を終るべきを、不幸にして継子を養ひし、否養はせられしよりして、かゝる毒婦となり了るものなればなり。况んや始めより謀つて殺すものゝ如きは、小説の外には滅多に無きものにて、多くは騎虎の勢止みがた

く、取り逆ぼせて「エヽ寧そ殺してしまへ」となるか、又はムラ〳〵と一時に起る癇癪より我を忘れて、ツイ〳〵虐遇甚だしきに過ぎ、過つて殺してしまふか、の二つなるに於てをや。古昔戰國の時代ならば兎も角今日の人間、殊に女の身にて、人を殺さんなどゝ、さる恐ろしき事を容易に謀るものにあらず。然るにツイ〳〵其樣な事を仕出來すに至る事情を深くも察せず、妄に凶悪殘忍として、これを罵る亦酷ならずや。君子は其罪を悪んで、其人を悪まず、といふ古語もあるものを、今左に繼子を殺したる或女の懺悔話を略記すべければ、讀者前述の事情と照らし合はして、察する所あらば本望なり。

懺悔に曰く。妾後妻として彼の家に緣付きし時、彼の兒の叔母なる人、彼の兒の頭顱を撫でゝ「坊は好い母ちやんが出來て嬉しい事ねえ、是からは柔順しく、能く言ふ事を聽いて、孝行をしなけれやいけませんよ、サア、不束者でございますが、御母樣是から御頼み申しますつて、御辭儀をしないかねと言はれて、羞かしげにピヨコンと坊主頭顱を下げたるを見れば顔を眞赤にして居るも可愛らしく、前なる盆の菓子一つ二つ摑んで與ふれば、叮嚀に重手して受取りたるも嬉しく、此兒がこれから我兒になるのかと思へば樂しく、其當坐は只何故とも無く可愛くて〳〵、何うかして一度御母樣と呼ばして見んと、樣々に工夫したれど、羞かしがりて何うしても言はざりしが、或時思ひ切つて「母樣と呼んでサッと顔を赤くしたる時には、我血を吸はれ我肉を割き與ふとも、此兒には惜しからじと思ひぬ。されども是れは其當坐未だ互に遠慮ありて、互いの悪い所の見えぬ内の事、追々月日の經つに隨ひ、無邪氣で愛らしくて天童の樣にも思はれし兒が、寐小便することもあれば、虱もわかし、青鼻汁を横撫にして袖口をひからす事もあれば、我儘もいひ、自暴もいひ、隨分厭らしき處も見えて、其最初珍らしかりし時程の感情は無くなりき、さればとて可愛からぬにはあらず、只可愛きになれてしまひ、追々其欠點の目に見え出せしといふまでの事なり。尤も只甘やかしてばかりも育てられねば、叱りも嚇しも度々せし事はせしが、憎みたる事は決して無かりき。然るに何故か近所および親族の人々の中には、妾が繼子いぢめでもするか何ぞの樣に、「母の無い子は可愛相だ事はの、智慧づきが早い事はの」

とチヨコ〳〵と陰言して居る由、近所のオサンどん又は兒守女などの口から度々妾の耳に入りぬ。それさへあるに彼の兒の叔母、即はちはじめ「坊は善い母樣が出來て嬉しい事よ」と言ひし人が、何故か無性に彼の兒の事を氣にし、彼の兒の實母が此世を去りし時、彼の兒を呉々も頼まれしといふ事を笠に着て、いらぬ世話を焼き、イヤあれではいけないの、これではいけないの、あんな着物が着せてあるの、綻びの切れたまゝで三日も捨てゝあつた事はの、と陰口をたゝくにぞ、妾も「そんなにいふ位なら彼の人が何うでも宜い樣にするが宜い」、と頭を立てし事もありき。其叔母といふは頗るの御幣かつぎにて色々の事を氣にする性質なるが、或日妾の室に來りて彼兒の膳立をなせるを見て、何故か顔色をかへ無言にて一つの皿を取出し、彼の兒の膳なる皿と取りかへたり。妾は何故とも其意を解せず、怪異しな事をする人かなと思ひしが、後にて聞けば其日は彼兒が試驗の當日なるに、緣の缺けたる皿にて菜を與へるとは餘りなる不都合ア、實母なき身のあはれさよ、と八方へ流布あるきし由。かゝる事度重なりては妾も嬉しくは思はず、時としては、彼の兒に「母ちやんコレコレをしておくんな」と賴れし時に「妾には出來ないよ、叔母さんにして貰ふが宜いやね」などゝツイ〳〵口ばしりし事もありき。かくて月日の經つ內には樣々の事も起りて互に氣を悪くし、双方敵味方の樣になりしが、彼の兒も追々妾に氣兼をしはじめ後には滅多に我家に居らず、何時も〳〵叔母の家に遊びに行き、時としては叔母の家から學校へも通つて、三四日も家に還らぬ事さへありけり。それもよけれど、妾の事について、有る事無い事一々叔母に告口し、叔母の家にては妾の陰言絶えぬ由も聞こえて腹立しく、氣がムシヤクシヤとして居る時に、彼の兒が、用を命じても「ハイ〳〵」と小氣味よく返辭をせず、厭そうにするを見ては「エ、厭なら止すが宜い」と甚だしく怒りし事もありしのみならず、憎らしくて〳〵打つてやりたくも捻つてやりたくもなり、又時として小憎らしき口返辭をせし時などには、實際捻りも打ちもしたる事ありき。そうすると其事が直に彼の叔母に聞こえて、又種々の事を言はれる、それを洩れ聞いては「子を育てるにそう〳〵甘やかしてばかり居れるものか、實母だとて叱ることもある打つこともある、妾は繼子だからと思つて可成我慢し

Digitized by Google　　Original from CORNELL UNIVERSITY

て居るのだ」と人にも分疏し我と我良心にも分疏して居りしが、心の底に何となく安からぬ思ひありき。されば其兒の泣きでもする時には、それが近所へ聞こえて、何とか思はれはせぬかと氣が氣でなかりき。それを小兒心にも知つて居たか、少しの事にもキヤーッと魂消る如き聲を發して、近所近邊の人々を驚かすこと度々なりき。かゝる時には、其小憎らしき顏の墨と涙に汚れたるが、鼻汁さへ垂たらしたる醜態の厭らしさ、アヽこの樣な兒を何の業で育てさせらるれかと忌々しく、其厭な氣持譬へかたなかりき。此心月日の經つに隨ひ追々増長して來て壓さえても止まらず。自分では餘程注意して居るツモりなりしが、何時しかに顯はれるものと見え良人にも度々意見せられし事もありき。かくて月日を經過しけるが、丁度彼の事起りし前晩も又例の如く、彼の兒の事につきて散々に小言を言はれ、彼是と分疏をしたのが良人の氣に障り、「良人に向つて口返辭をするか」と怒り出し、犬も喰はぬ夫婦喧嘩をなせし其餘憤翌日も尙さめず、獨りクヨ〳〵と思ひながら針仕事をして居る所へ、近邊の兒守女が來て「昨日彼の叔母の家に行き居りし處、妾の良人に向つて彼の叔母が、妾のある事無い事信實らしく語り、ねえお前が其ういつたねえ、と側なる彼の兒を證人にとれば、彼兒も得意になりて、何時ぞやも斯うであつた、彼ゝであつた、と語り居たり、」との事實を妾に語り聞かせけり。さなきだに昨夜の餘憤に燃えたてる胸の、益々燃えたち、堪へがたき折ふし、學校より歸り來りし彼の兒の顏附の憎らしさ、今思へば我ながら慙愧の至りなり。其の景色を彼の兒は見てとりしものか「母ちやん只今」と言ひすてゝ外の方へ出で行かんとするを、妾フト見れば袖口を甚しく綻ばして居るにぞ、この儘で叔母の家へでも行つたら大變だと思ひ、コレ〳〵と呼びとむれば振りかへり、怖々近つき來るを引よせて「マアこんなに綻ばして」といひし其語氣も手ざはりも、激したる折とて、荒かりけん、彼兒は泣出しそうなる顏附にて「私が破ぶつたんじやあないと分疏する「誰れが破つたつて、お前がソッと大人なしくして居るのに、破ぶるものがあるものかね、縫つてあげるからお脱ぎ、此儘で又叔母さんの所へ行つて、色んな事を言つけやうと思つて、サアお脱ぎ」など言いながら、帶を解かせんに其帶に手をかくるや否、彼の兒は何と思ひけん、アレーッ



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

と叫んで逃げ出すにぞ「何うもしやしないじやないか」と引とらふれば、倘々泣き叫ぶ。其時妾ムラ〳〵と一時に癇が起つて、一つ二つ打はせけるに、今度はキヤーッと死聲を立てられ、こりや堪らぬと思ひかへして「サア何うもしやしないからモウ泣かずにお默り」と言ひながらフト側なる柱懸けの鏡を見れば愧かしや凄しき我面相、ハッと思ひて氣を取り直し、無理に笑顔を作りて、すかせどすかせど泣きやめず、何うしたら宜からうと、氣をあせり、百方にしても其効なきにぞ、又ムラ〳〵と癇が起り「エ、何もしやしないじやないか、此兒は仕樣がない」と不思大聲になれば、又アレーッと叫びて逃げ出す「エ、仕方がない」と其時思ひつき、有合ふ手拭とりて猿轡をはませ、後手に縛りて、押入れの中へ押込め置きけるが、氣になつて堪らず、三十分ばかり經つて後、ソッと引あけて見れば倒れたるまゝ、ヂッとして身動もせぬにぞ「コレ、モウ大きな聲をたてぬ、といふなら堪忍してやる」といひつゝ引起さんと手を觸るれば、こはいかに石の如く冷え渡れり。ハッと驚き引出して能々見れば死で居たり、蓋し猿轡に鼻の孔までも塞がれて呼吸をとぢたるなり。エ、氣が付かざりしエ、何とせん何うしやう、と周章狼狽き、水を吹いて見ても、有合せの寶丹を嚙で口移しにして見ても、早時遲れたりけん其効なく、茫然と屍骸の側に空しく坐り居りしが、これではならぬと氣を勵まして起上りしが、さりとて別に施すべき術もなく、考へて見れば我良人、先妻には勿論彼の叔母にも申譯なし、否々それどころにあらず、我身は大罪を犯したり。恐ろしい絞首にも逢はねばならぬか、こりや斯うしては居られぬと、裏庭へ飛び出し井へ飛びこまんとせしところを、何時の間にか歸り居りし夫人に抱とめられ、それより詫びもし、叱られもし、愚痴もこぼされ、こぼしもし、窃に醫者を呼んで來て見ても貰らひしが、矢張り其効なかりき。さりとて此儘には濟まされず、夫婦相談の上、金と人情とで其醫者を說きつけて診斷書を書かせ、野邊の送りまで濟ませ、ホッと一息つく間もなく、何うして是が知れしか、不意に巡査に踏み込まれて捕縛されしが、思ひしよりは刑も輕くて嬉しかりき。さて出獄の後は良人に乞ひて暇をもらひ、出家して彼の兒及び先妻の菩提を吊はんと欲せしが、人々に止められて止みたり。ア、妾は實に大罪を犯したり、良人に



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

も彼の叔母にも千万相濟まぬわけなれば、縦令此身を切り刻まれても仕方も無きわけなれど、悲しいは世間の評判にて、妾が日頃より彼の兄を亡きものにせんと企て居り、過失に托して故意に殺したるなり、ヤレ惡むべき奴よ、大毒婦よ、と囃し居る由なり。アヽ是も全く我罪よりなれば仕方も無いわけか、畢竟それもこれも全く妾が短氣より起りし事と思へば、觀音樣に願をかけて、生涯腹の立ちませぬ樣に、立てますまいと決心したりと。是れ過つて殺す方の例なり。

扨又故殺の例には余が故村の近邊に於て起りし一事實を擧げん。其女は姑がゝりにして其姑がまた一通や二通りの八釜敷屋にあらず。其上に其良人も亦頗る短氣にて些細の事にて其妻を打懲らす如き事屢々なりき。されば家内に波風絶えず、ソリヤ離縁で候の、ソリヤ死でしまふの、といふ大騒ぎが度々始まつて近所の者の迷惑一方ならざりき。此の樣な辛い家なれども、嫁は辛抱せねばならぬわけありき。そをいかにといふに、其女の里方には父も母も早く世を去りて今は頑固なる兄と輕薄なる兄嫁とのみなるが、それさへ零落して北海道へ移住でもせんと言ひ居る所なれば、若し離縁でもせられなば尚一層の辛らい目を見ねばならぬわけなればなり。是を以て嫁は堪えがたきを堪へ、忍びがたきを忍びて、ひたすら波風を起すまじとつとむれば、隨て幼き稚子にまでも頭が上らず、口惜しさに夜半の枕は濕り勝なりき。然るに姑はそれを可愛相とも思はず、常にイラ／＼／＼と嫁いびりをなし、又無性に孫を可愛がれば、孫は付けあがつて非常の猾兒となり、其上に頗るの泣蟲にて、一寸觸つても泣き出して、而も泣き出したら容易に泣やめず、半日でも泣いて居るといふ風なれば、嫁の氣苦勞思ひやるに餘りありき。かくて或夜の事、姑も良人も留守にて、嫁は稚子の機嫌とり／＼一人針仕事して居るところへ、不意に大なる鼠走り出でけるを一間に閉込め、打殺さんと金火箸を振廻はし居たるが、いかなる拍子にやありけん、其火箸がシタヽカ稚子の額に中り、キヤツと叫んで倒れたるに驚いて抱起して見れば鮮血淋漓たり。凡そ額の創はホンの一寸したる微傷にても夥多しき血の出るものなる上に、恐ろしき姑が大事の／＼愛孫にて、日頃腫物にさはる如くに取扱ひ居る兒に怪我をさせたかと思へば、其血が二倍にも三倍にも見えて凄じく「こりや何うしやう」と周章

狼狽きつゝ其血を拭ふて見れば、何でもなき微傷なるに稍安心し、其兒の泣きを止めんと百方に盡力しても、容易に泣やめず、漸く有合せの菓子を與へて機嫌を直させ、ヤレ〳〵と思ふ間もなく、早其菓子を喰べてしまつて又痛い痛いと泣き出して止めず、又與へれば又喰てしまつて又泣き又泣きして、遂に其菓子も無くなりたれど未止めず、何うかして寐かさんとすれど首を掉つて聽入れず、詮方なさに捨てゝ置けば果は癇癪を起して近所近邊へ響き渡る程に泣號く一ア、何うしたら宜からう、こんなに泣くのも宜いけれど、明日又隣家の饒舌嫗が姑に向つて何か言ふであらう、それにあの額の怪我もあるから、又妾か何うかした樣に言ふて八釜しう叱るであらう、叱られても我慢さへすればよいけれど、良人までが八釜しう言ひ出して出て行けの何のと言ふであらう、せめて良人だけでも妾の分疏を聽わけてくれる樣なら宜いに、アヽこんなに泣いて居る所へ姑でも歸つて來て、彼の怪我を見たら何んなに言ふであらう、エヽ本統に何うしやう」と思ひ出しては胸で戸がコツトリといふても早それかと恐ろしく、何卒して早く泣き止めさせる工夫は無い事かと機嫌をとれば



とる程倘付あがつて泣くにぞ、流石の嫁も癇癪を起して「そんなに泣く位なら妾はモウ餘所へ行つてしまふ、獨りこゝに居つたら怪物が出るよ」と言ひすてゝ裏庭へ出て行けば、ヤン〳〵ヤーンと有丈の聲を立てゝ泣き號ぶ「厭ならお默りなと言ひつゝ歸つて機嫌をとつても、倘止めず又出で行けば又激しく泣く、又歸つて機嫌とつても矢張り止めず、かくすること兩三度遂に思ひ切つて良久しく隱れ居りしところ、小兒はヤン〳〵〳〵と泣きながら後を追ふて椽先に出で、地團太踏んで喚き居りしが、いかにかしけん、椽を踏はずして庭に落ちけるにぞ、驚いて走せかへり、抱き起して見れば、庭石にて頭をうち、右手を擦り剝ぎ、出血夥多しく、泣く聲纔に、母の肝を破ぶる「こりやマア何うしたら宜からう、お前が餘り泣くからだ」と獨言ちつゝ手當をしながらも「こうして居る所へ母さんが歸つて來られたら何うしやう、こう泣く聲に驚いて隣家の彼の饒舌嫗が來はせぬかと氣が氣でなく、手で其口を押さえて居れば、見る〳〵其顏腫れあがりて、怪物の如くなりけるにぞ「モウ斯うしては居られぬ、と思ひ出しては、姑の恐り罵る恐ろしき顏色、良人の猛りたつ凄しき聲ア

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

りくと目に見え耳に聞ゆる如く、我身は何うなることぞ、と死ぬにも勝る苦痛の胸を刺す如き其兒の泣聲「ヱヽ此兒は仕様が爲い」と何時しか總身の血が逆上して我を忘れ、遂に殺意を生じて、絞り殺し、自身も死せんと思ひ、庭の松が枝に細帶を掛けるところを所謂隣りの饒舌嘆に見付られて救はれたりとの事なり。是は前者に比すれば、大に悪むべき所あるか如しと雖も、其こゝに至りし原因を沈思熟考せば、自ら涙溢るゝものあらん。

世の繼子殺しといふもの大抵は右の類に過ぎず。それが其れから其れへと傳はり行く間に、多少づゝの想像が加はり、作意が加はりして、數倍大仰なる事實となり了るなり。察せざる可けんや。尤も謀殺の如きも世に全くなしといふにはあらず、即繼母が姦夫に迷ふて繼子を邪魔にし遂に謀殺に至りしもの、又は封建時代の御家騒動にある繼母の如きもの罕にはあるなり。然し是等といへども多くは其女一個の心より起るにあらず。凡そ女は氣弱きものにして決斷に乏しく、何事も他人に依頼する癖ある代りに、我信用する人の腰押しある時は思ひもよらぬ大膽なる事をなすものなり。されば彼の御家騒動の繼母の如きも其始めは、權勢爭奪の奸臣に利器視せられ其教唆によりて少々づゝの惡計を廻らし居りしものが、其惡の洩泄を防がん爲めに、それからそれへと惡計を廻らして底止する所なく、遂に大なる事となり、果は其敵を殺してしまはねば、我身の存亡さへ覺束なきに至り、遂に思はぬ大惡事をなすに至るもの多し。彼の小説にあるが如く、最初より惡むべき恐るべき大陰謀を企つるものはメッタに無き事なり。姦夫に迷ひて繼子を殺す繼母といへども、大抵はこんなものなり。而して是等とても其始め少しづゝの惡計を廻らすに到るまでの經歴を詳悉せば、普通の婦女子としては、寧ろ憐と化せざるを得ざる事情の必らず存在するものなれば、寧憫れむべきも、強て惡むべきにはあらざるなり。讀でこゝに到らば人或は言はん、汝の如く論ぜば世に惡むべきもの無きにあらずやと。然り、人を惡むは不德なり、孔明が馬謖を斬りし心を以て、一切の惡人に對せずんば、君子にあらざるなり。況や世間普通の繼母に於てをや。





Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

# 高等女學校全盛の時代

## 附り、宣教師派女學校

女學界現今の大勢は、既に、前后二回（女學雜誌第四百四號同第四百十一號）の論文を以て詳辨實證したるにて明らかならん。

而して、其の事實に顯はれべき最初の降臨は、蓋し所謂ゆる「高等女學校」なるものに先てせん哉。見よ、看よ、今后一二年の間だは、所々に其の新設を見、東西南北、續々相踵ぎて、遂には、小市大町の何處にも「高等女學校」なるもの、無き所ろはあらざるに至らん也

此に至りて、吾黨は復たび、宣教師派女學校に論及す。復たびと言ふものは、實に前言を繰返すに過ぎざるが故也。吾黨は、明治二十五年の秋冬の交、三篇四部の長論文を公けにして、該派に對する赤誠を披らき、其の成立と現狀と矛盾と調和とを仔細に講究して、詮ずる所ろ、左の一策を採用せらるゝの外、道なきことを宣言したりき。（女學雜誌第三百廿七號より第三百卅三號まで參看）

曰く、宣教師派女學校は、高等教育、普通教育の二つを兼ね施こし、高等教育には英語を多く用ひ、外國教師專ばら教授し、普通教育には、殆んど邦語邦文のみにて教授し、英語は只だ其一科として極めて僅かに用ゐ、而して其の監督を日本人の教頭に委托する事。

吾黨は實に此の普通部をして彼の「高等女學校代用」たらしめんことを熱望するもの也。而して、斯る宣教師派女學校の續々各地に新設せられて、精神的女學が此回の大勢と共に普及せんことを只管らに熱望するもの也。

# 女學振張の活動機

頼むとは自から頼むより力あるはなし、失なふとは自から失なふより大ひなるはなし。若し自から失なふときは、世人悉とく吾に合力せんとするも詮なし、若し自から頼むときは、世人悉とく吾に失望するとも尚可なり。故に、最初に省りみるべきは、吾が心、吾が抱負、そも何如んと云ふの一義にある也。

世上すべて女子教育に反抗するときも、若し女學生彼自身に於て確乎たる所信ありて、深く學を好み、志を立つると

毅然たるものあらば、吾黨は欣喜して之を有望なりとせん。之に反し、世上大ひに女子教育に傾向し、輿論切りに之が擴張を揚言するの時と雖ども、女學生彼自身に於て、斷然として意を決するの勇猛心振ひ起るの后にあらざれば、吾黨は未だ之を頼みとせじ。人を射んとするには先づ馬を射、家を建んとするには、先づ礎を置ゆ、人事盛衰の根本は、眞とに其心底にありと言ふべけれ。

凡そ、眞理は、人を待つて活動す。道は千古に明らかなりと雖ども、肉躰を取るにあらざれば、世を救ふとなし。左れば、女子は男子と同もに教育せざる可らずと言ふの義理は、抑も誰ありて正さしく其眞理を疑はんや。即はち疑はずと雖ども、信じて之を活動せしめんと欲せば、先づ活動する所ろの生命なかる可らず。生物ひとり生物を生む。最初に活動する所ろの人物なくして何如で他の活動を刺激せんや。

此故に、今にして、尤とも望む所ろのものは、女子教育奬勵の空論にはあらず。眞に之に生命を献ずるの先輩と、先づ其敎を受けて女學の結べる果を生ける身躰に顯昭する女學士との世に活動せんとこれ也。此の活動は他の活動を産むべし。

千波、万波は一點の中心より揺ぐ。烈風、大風も、一所の微動より起る。

夫れ人は達觀するを要す。將來、國歩世運の趣むく所ろ、教育の進歩は必然の勢ほひ也、而して教育に偏僻なし、女子をして男性と相對せしめて、及ぶべき丈け其の天稟を開發せしめんとするとは、日輪の明日出るが如く、來年の來ん年に來るが如く、到底必らずや來至すべき數勢ならずや。左れば、人、五年、十年の后に思を寄せ、更に二十年、三十年の后に思を寄せなん以上は女子教育の大に行はれべき必至の勢運を確信するは極めて容易、又至つて明白なるにあらずや。識者、何故に孤疑して逡巡せんとは爲すや。

◎京都同志社女學校教師デントン嬢は、万國婦人矯風會の日本在留書記たる職をうけ、月俸五十弗を支給せらるゝことゝなりたり。因みに言ふ、ジヤパン、エバンゼリスト紙上毎號に見ゆる婦人矯風會記事欄は、同女史の擔任せらるゝ所なり。

◎亞米利加の黑人女子中有志家は、ボストン府に會議して、黑人女子協會を設立したり。

◎英國女王陛下は、中風症を患へらる。

◎悲しひ哉、石井十次氏夫人は遂に永逝せり。

# 裁縫科教授細目

右は渡邊辰五郎氏教授法の細目なり。

◎第一年級細目表

運針　針目を一分五厘になして一時間小學生なれば廿尺以上六十尺迄小學以上の生徒は一時間に五十尺以上百尺迄縫はしむ可し

同　針目を一分にして切地を二重或は三重四重になして三尺以上五十尺迄縫はしむ可し

穴カヾリ　五分の穴になしては一時間に二つ以上七つ迄なさしむ凡三十箇稽古ムリ穴鳩目穴の二種さす

眞都利縫ひ　針目を二三厘になして一時間に一尺以上三尺迄なさしむ

西洋前掛大人物雛形及實物一箇を五時間内外に手縫ひなさしむ

西洋前掛子供物同前の如し

シャツ大中小雛形及實物、雛形は二時半内外、實物は四時内外を虵さす

ヅボン下　大中少雛形並に實物、雛形は二時間内外實物は四時間内外に縫はしむ

日本形　前掛實物一箇を二時間内外に縫はしむ
但し上等なるものは此限りにあらず

單襦袢大中小實物一枚を四時間内外に縫はしむ

袖形及裙形　木綿或は絹布を用ゐて五分以上の袖形一時間に三箇以上六個同裙形木綿及絹布を用ゐて三分以上一寸位を一時間に二箇内外に縫はしむ

袷半襦袢實物一枚を六時間内外に縫はしむ

木綿單物　一ツ身一枚四時間内外三ツ身四ツ身の類五時間内外大人物男女單物一枚を十時間よりして六時間内外に縫はしむ

木綿一ツ身二ツ身三ツ身四ツ身前衿裁　衿雛形及實物は一ツ身の雛形は四時間内外二ツ身三ツ身は五時間内外四ツ身前衿裁は六時間内外に縫はしむ一ツ身の實物は一枚は十五時間内外二つ身三ツ身は實物一枚を十七時間内外四ツ身前衿裁は一枚を十八時間内外に縫はしむ

女合羽雛形及實物雛形は一枚を三時間内外實物は八時間内外に縫はしむ
但し綿入は一枚に付二時間づゝ増す

木綿物男女綿入　雛形及實物雛形一枚は七時間内外實物一枚は十五時間内外に縫はしむ

男女大人及子供の綿入羽織　被布雛形及實物子供物雛形一枚は五時間は六時間内外同實物は十二時間内外に縫はしむ
内外同實物は十時間内外大人物雛形一枚羽織二枚被布大人一枚子供一枚を縫はしむ
但し男女大人各五枚子供

女鯨帶常の物實物二本壹本を仕立るに八時間内外になさしむ

男帶常の物實物二本壹本を仕立るに五時間内外になさしむ

女袴なみ袴大人物及子供三種　雛形及實物雛形は一箇に付三時間内外實物は一箇付六時間内外に縫はしむ

男兒馬乘袴五つ子及七つ子雛形并に實物雛形は一箇を三時間内外實物は一箇を五時間内外に縫はしむ

（右之細目は四月より始め三月迄に縫ひ揚くる者さす）

同第二年級

帷子類二枚一枚を七時間内外に縫はしむ

單半重及本重雛形並に實物、雛形五時間内外實物は八時間内外に縫はしむ

長襦袢實或ハ雛形雛形一枚は六時間内外實物は十時間内外に縫はしむ

男女袷小袖各一枚ヅヽ一枚は十五時間内外に縫はしむ

男女小袖重分物各一組ヅヽ　男小袖一さ重ねは三十二時間内外女小袖一さ重ねは三十八時間内外に縫はしむ

女襠あり袴大人物雛形及實物雛形一箇は三時間内外に縫はしむ實物は六時間内外に縫はしむ

男馬乘袴大人物及中裁　雛形及實物　雛形は三時間内外實物は七時間内外に縫はしむ

道行雛形并に實物しむ　雛形綿入一枚に付六時間内外實物は十時間内外に縫は

本比翼附比翼各一枚ヅヽ、雛形或は實物雛形一枚は十五時間内外實物四十時間内外に縫はしむ

女鯨帶上仕立二本實物一本を十五時間内外に縫はしむ

女丸帶上仕立一本十二時間内外に縫はしむ

男帶上仕立二本一本を十二時間内外に縫はしむ

男合羽雛形及實物一　雛形一枚は十五時間内外實物一枚は十八時間内外に縫はしむ

股引雛形及實物　雛形一足は二時間半内外實物一足は五時間内外に縫はしむ

足袋二足實物一足を三時間内外に縫はしむ

男女綿入羽織各一枚づゝ實物十二時間内外

單羽織　雛形及實物雛形一枚に付四時間内外實物一枚は十時間内外に縫はしむ

蚊帳一張雛形八時間内外に縫はしむ

大夜着一枚雛形一枚付十二時間内外に縫はしむ

布衣信一枚雛形一枚に付六時間内外に縫はしむ

女兒洋服雛形一枚男兒洋服雛形一枚或は實物雛形一枚に付七時間内外に縫はしむ



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 爛煥

## 悪年少と家庭

鷗村生

人其子の爲に富貴利達を希ふは親たるものゝ自然の情なりと雖も、子女をして、善美なる家庭の幸福を享くるとを得せしめずんば、彼が其子女を賊ふの罪甚た輕からじ、假令子孫の爲に美田を買はずとも可なり、もし彼等をして良家庭に生育するを得せしめずんば、これ子女をして百年の幸福を失はしむるものといふべし。人の一生の幸、不幸は、其生育したる家庭の善美なると否とによりて、なほ幼稚なるの日に既に定めらるゝといふも敢て過ぎたるの說には非ず。

予屢彼の慈母を喪ひ、善美ならざる家庭に生育する、多くの男女兒が、其年齒の幼少なるにも似合はす、才はぢけ、大人ぶり、ヒガミ根性あり、曲ぢくれたるを見る毎に、感情に脆き我が胸間には、言ひ難く、壓へ難き憫憐の念を催ふして、未だ之を袖に濺がずと雖も、心眼涙に濕へり。會此世に花の如く、玉の如き貌を賦せられて生れ、人よりは愛せられ、いつくしまれべき少女の身が、己の罪に由らずして、不幸にして善美なる家庭に生ひ育ち得ざるが爲に、却て人の憫みを買ひ、而も彼は自ら未だ其不幸を悟らざるものをと思へば、殊更切々の情を催ふし、親しく彼等に接して我眞心より流れ出づる慈悲の敎へを加へて、其品性未だ頑固ならざるに於て、之を良道に導きたきの念に。自ら却て悶煩することあり。

抑も世にも不幸薄命なるものとしいへば、善美なる家庭に生育すると能はざりし子女ならん。彼等長じては、頑僻固陋の人となりて、優長寛厚の性を備ふると能はざるに至ると多く、又之よりして往々厭世悲觀の人を生ずることあり、かのマンフレッドによりて多く自らを描寫したる、厭世の詩人バイロンの事を思ひて試に其母の性質を知らんにはバイロンのバイロンたりしものまた其由て起りたる處を揣摩忖度するに難からず。如此きはなほ可なり、かの年齒幼少にして既に社會の害物を以て目せらるゝ、邪惡なる年少男女が、其由て生まるゝ處善美ならざる家庭にあるとを思ふの時、この天下の



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

最薄命兒の爲に憫憐の情制し難く、哀れや、良家庭の良子女と共に同じく生長の性を享けながら不良暗愚なる母の懐に宿り、善美ならざる家庭に長じたるが爲に、この運命に陷り、而も自ら悟らずして、一生をこの非運の中に殲ぼさんとするは、豈に悲哀の念に堪ふべけんや。友人某曾て誤りて刑辟に觸れて、獄に繋がれ、擧げられて一時の牢長たりし時、支配下の囚徒の多くは竊盜の罪を犯して、爰に投ぜられしものにつき、各其幼時家庭の生育状を尋ねしに、或者は母を喪ひ、或者は不良の母を有せしものにして、比々皆是れ善美なる家庭の幸福を味ふ能はざりしものなりしといふ。孟夫子性善を道ふ、荀子は之に反して性惡を說く、而も此二人の者は人の性の善惡に岐るゝに先だちて、家庭の恩化教育なるもの丶俗の道を二にせしむるに預りて最も有力なることを道はず。孟子性善を道ふ、いへば必ず堯舜を稱すと。堯の事は予未だ之を知らず、舜に至りては、瞽叟を父とし、繼母の手に長じ、家庭の幸福を味はふ能はざるものなりしと雖も、なほよく聖人たるを得たる所以のものは、即ち未だ學ばずして既に聖者たる有數の天稟を享けしによらずんばあらず。世の通常人に



至りては、善美ならざる家庭殊に父邪に母姦なる不良の家庭に生育して不良の兒たるは抑も亦免れ難きの數にして、斯の如きは、敢て荀子が所謂性惡なるの罪に由るには非ず蓋し家庭の幸福を欠きたる、不幸薄命兒の運命なりといふべし。」

予曾て東京感化院を訪ふ、同院は神道家高瀬眞卿氏の、嚮に監獄教誨師の職を奉ぜし時、囚徒の生育に就き、多ほく見聞する處に感奮して、明治十二年に創設したる感化協會なるものが、貴顯紳士の贊助を得て發達したる事業の現象なり。同院創立以來明治廿六年に至るまで入院したる惡年少者二百名、其中改悔の實蹟を擧げ、各職業に就きて退院したるもの五十餘名といへり。但し多分の者は感化の見込なくして退院せしめられたりと知るべし。予の訪問するや、院の幹事白井某氏、示すに廿六年度中旬取調の統計表を以てす。就て入院生徒の生育及び不良原因を取調べたるものを見るに、最近入院生百人につき、其割合は實に左に記するが如き者なりき。但し一人にして二三の原因を兼ぬるものありと知るべく、讀者之を見て、如何なる家庭よりして、尤も多くの不良年少の生育するかを考一考すべし。

Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

| | |
|---|---|
| 父母の養育を受けしもの | 三十三人 |
| 父のみ養育せしもの | 十七人 |
| 寡婦の養育せしもの | 十八人 |
| 祖父母親戚の養育せしもの | 二十一人 |
| 他人の養育せしもの | 五人 |
| 繼母の養育せしもの | 十四人 |
| 愛情の過度に出でたるもの | 三十七人 |
| 幼時に孤兒となりしもの | 七人 |
| 苛酷の養育を受けしもの | 六人 |
| 冷淡なる養育を受けしもの | 五十二人 |
| 遺傳の不良なるもの | 十三人 |
| 妾腹に生れしもの | 六人 |
| 生母の行狀不良なるもの | 十一人 |

孰れか善美なる家庭に生育したりと稱すべきものぞ。又院生二百人に就きて其父兄の身分を聞けば、往々驚嘆を催さしむべきものなきに非ず。

| | 華 | 士 | 平 |
|---|---|---|---|
| 農 | | 二 | 一九 |
| 工 | | 二 | 九 |
| 商 | | 二 | 五一 |
| 高等官 | 一 | 一〇 | |
| 軍人 | | 三 | |
| 警官 | | 七 | |
| 銀行會社員 | | 二〇 | |
| 縣吏 | | 五 | 三 |
| 學者 | | 二 | |
| 教育者 | | 四 | 一 |
| 醫師 | | 六 | 二 |
| 家令吏 | | 四 | |
| 金貸 | | 三 | 一 |
| 飲食店 | | | 三 |
| 遊藝 | | | 一 |
| 無職 | 三 | 一〇 | 一五 |
| 未詳 | | 三 | 六 |

合計二百人

東京感化院の制規として、院生の多分は其父母たるもの、相當の財産を有して、其不良邪曲の子弟を感化教誨せんが爲に、幾許の資金を投じて、之を同院に附託するものたれば、院生の身分たる、先づ中以上社會の者多しと稱すべし。且は又同院には未だ女兒部の設けなき故、同院の今日迄に統計し來りたる如きは僅に惡性年少者流の一小區分たるに過ぎず。若し夫れ中等以下社會にして、父母の其惡性の子女を感化院に附託し得るの資力なく、其子女は家を離れ人に棄てられ、現に社會に害毒を流しつゝある者の如きに至ては、其數莫大のものたるべく、さも上流の社會に於ても、家名の榮辱を思ひて、敢て其邪曲の子女を、慈善者の手に托することをなし得さるもの頗る多かるべし。然るに此等惡年少者が、如何なる父母の間に生て、如何なる家庭に生育せしかに至りては、未

だ其統計を擧げざらんも、東京感化院が既に示したる一班を擧げて、以て全豹を推知するに、殆ど誤りなきことを得ん。」若し家に不逞不良の子女あらんか、父母は之を憂苦し、或は之を懲悔し、彼等の罪を攻むることを知るも、却て自ら彼等の爲めに高美なる家庭を備ふること能はずして、社會に害毒を流すものを生育したる自己が罪の爲に鼓を鳴す者殆どあることなし。高美を欠き、甚しきに至ては不良なる不幸の家庭の存せん限りは、不良不逞の子女の跡を絶たんこと難しと稱すべく、社會よりして無限想行なる年少の驕慢を絶せんこと難し。而も自己の情慾に驅られて、刺ある花に迷ひ、舞ふる蝶に戯れて、子孫の爲を顧へず、家庭の爲を計らずして、其子女に無頼放蕩者を出すものに至りては、其子女の罪は却て憫諒すべくして、其父母の罪の、社會に負ふ所、頗る重きを責めざるべからず。父母の罪の子孫に酬ゆることを思へば、轉た天道の是非を知るに迷ふと雖も、これ即ち家庭の謹嚴高美ならざる可らざるを教ふる冥々裡の大訓なることを知るに於ては、天道は昭々乎として甚だ明らかなるを曉るに餘りあり。

## 時文

### ○テニソンのドラ

當昔、某文士其小說中に言へり、「お前の名は、虎かエ、虎と云へば、聞く丈けでさえ、可愛けい名だチー」と。蓋し、テニソン詩中のドラに擬みしなり。左れど、虎の名字を可愛ゆしとす、當時本邦にあつて噴飯の事とせり。近頃、詩人某、同じく此詩を譯して、一句「熱を捕へ」に及ぶ、讀むもの啞然たる久し。

### ○鼎軒の罵嘲

當代ユウモアに巧みなるものは、夫れ鼎軒か。罵よく罵れども、其味や甘し。昔自一冊、甚だしく激語するの時と雖ども尙ほ、舌爪く短ゆらぐ、罵が愛嬌の聲音はあり。近頃東京日々新聞を罵しるや、之を國賊に比して、醜なれども近づからざる可らず、此の人家に必要なるか故と言ひ、亦之を鸚鵡に喩えて、之を教ゆれば國分思口をいふ、其役はたゞ數えられし事實を報道するにありと言ふに至つて、鼎軒がやゝ本氣らしき罵言其の絶頂に達しぬ。

### ○大隈伯昔日譚

最も多く大隈伯に聞たきは、維新以來の事なれども、其は時流に繼ひありてか聞くことを得ず。並に伯の少時より明治六年に至る迄の昔日譚を承はる、後進を益するもの頗ぶる多し。文章は洗練なれども、今少し大人らしくばと思はる。大人を寫すに餘り若々しければ也。これ筆者徒らに裝飾の所に迄て力こぶを入れて、餘りに感服し過ぎたる自個の告白なれば也。されど飄然たる伯自身の口調もあり。其の大西郷を記すの詞、「流石がに」、「流石がに」と幾度か繰返す所ろ、不知不識の間に此氣を萌んする語氣は現はれたり。

### ○后の三日月



Digitized by Google
Original from
CORNELL UNIVERSITY

惜しむべし、情熱殆んど枯れたり。最とも愛讀する吾等すら遺憾とせず。

## ○伏魔殿

櫻痴居士著
春陽堂發兌

磯山松

社會の裏面を無遠作に暴露して、所謂紳士とか貴人とか稱するもの丶醜行不德を描寫するの小說は、甚世態に通曉し筆に巧なる櫻痴居士によりてものせらる。その近著『伏魔殿』なるものもまた其類の一なり。素より讀行く中には、文章の妙麗婉轉たると、伏魔殿裡百鬼妖怪の狀態とに兩つながらアツトばかり驚き入るの外とてはなけれども、其記事往々卑猥を極めて、讀むに堪へざるあり。また徒に社會の内幕を暴露するといふに止まりて、かくの如くして世道人心に益あるかといへば、否寧ろ却て社會に小利巧に立まわるものは、かやうにすべきものなりとの方術を教ふるが如し。假令ひ白く塗りたる墓の僞りを惡むといへども、濫りに好んで之を發揮して、其臭氣を洩らすは往々害惡を流すとあり。抑も櫻痴居士の此類の作をなす、世態の惡むべく、懼るべきを知らしめんとの一片慷慨の念に出づるが如しと雖も、其文に想に顯る丶所を以てすれば、無乃世道人心に弊害を與ふるの誹りを免かるを能はざるなり。

## ○やけ火箸

漣山人著
春陽堂發兌

全篇の骨子よりいへば、正直正太夫の油地獄をまねたやうにも考へらる丶かなれど、彼とはちがいて、奇拔な筆をも用ゐず、斬新でもない着想を平面運成の文字で、さもやす〳〵と書き流したる處に、漣山人の長所は十分に發現してあつて、一篇まとに面白う讀み了はんぬ。可憐溫和なお良が、言ひ名付の夫の爲次郎が奉公してゐる家に、別品のお孃さんがあると聞いて、心配し、別莊の垣根からお孃樣をのぞひて見やうとして、爲次郎と顏を合はすところ、また爲次郎にいはれてから、每夜母の寐靜まるを待ちて、竊に手習いするところなどの、まとにこまやかなやさしい乙女心を寫したるなり。浮氣娘のお浪が我儘で、多情で言ひ名づけの妻がありと知りながら、爲次郎を無理にも婿に買ひたく、別莊で清淨潔白な爲次郎にキフイな酒を強ひて、ツヒ其身を穢さす處、板橋法學士と顏をあはしてから、急に心が其方にうつりて、爲次郎が煙たくなる處など、其多情浮氣な性質を描いた處妙筆々々。お浪は刺のある薔薇の花のやうで、お良は野中の菫の如く、閨中の双絶なり。意志の弱い爲次郎、俠氣な太兵衞など、それ〴〵の人物をや丶圓滿に寫したのは、平易であつて、しかも婉麗なる漣山人の筆の巧みである。

## ○日本昔噺第十三編　八頭の大蛇

大江小波編
博文館發兌

此篇には巖本善治氏の序文、飯田武郷大人の今様あり。本文は素盞雄命がおろち退治の昔話を、小波が例の婉筆にてやさしく寫し、また同人自作の萬歲謠々を添ふ、子供の讀本に至極結構なり。

## ○東亞學院講義錄

第一年級第一號

ゲーベル博士の哲學概論、藤田豐八氏の支那哲學史、小柳司氣太氏の支那文學史、田岡佐代治氏の蒙古史、藤田精一氏の東洋近世史、根本通明氏の周易講義、田中登氏の老子講義及び西廂記講義等、學者諸君が各得意の方面に於て、講義丁寧なり、多くの支那文學講義錄中にて一歩を拔くもの、書生研學の好津梁なり。

## ○軍事短篇小說　水雷艇

江見水蔭著
博文館發兌

曩に水蔭が中央新聞紙上に連載したる短篇小話三十七種を一括するもの名けて『水雷艇』といふ。小說長きが故に妙なりとも定まらねば、短篇の想また棄てたものに非ずとの作者自身の口上書に詐りなし、讀者の熟來妙文で戰役談をさも剛壯にさも悲壯に描いたるは敬服の外なし。種は新聞の雜報に見えたやうな話しなれど、かうやつて水蔭に書かれてあると、さも其場の實景を見るやうで、眞に迫るの心地がせらる丶、水蔭がスケツチに長じたるはいつもながら感服するに餘りある。

# 片々

## ●野中至氏夫人

叙象探検者野中至氏が富士山絶頂越年の告文を讀み、誰か感奮せざる。之と同時に、氏に内助して其後ろに一大勢援を寄せつゝある佳人あるを知らば、感奮更めて切ならざるを得んや。古より大事を創むるもの皆斯の如し。見よ、彼の可憐なる婦人は此の嚴冬に於て、富士山絶頂に越年せんとは爲す也。

## ●下田歌子女史

女史は周遊にあると尤短く、倫敦内に留まると稍や久しく、英國に學ぶと尤も長く、亞米利加は僅に通過したり。故に、其の觀察したる所ろ若ば推知せらる。華族女學校の同人が之を歡迎するの席上、女史は短くして長き所信を一言せり。曰く、多くの女子大學を見たるが、宗教上の感化著るしき所ろ尤も其かりき。多くのホームを見たるが、宗教上の感化滿たる家庭尤も宜しかりき。外國の婦人が活動の跡を見れば、我等もヂットしては居られぬやうに思ひたりと。

## ●救世軍來

「救世軍」來れり。其の隊は男女とも凡の熱信あるを皆な人の許す所なれど、取分きて婦人の熱信こそ觀るべきものなれ。今回來着せしうちの一女子ミス、某と云ふは、名高き俊才にて、年少かくが國の女子大學を卒業せしが、一朝發心して世の嘲ひを敝履の如く棄捨て、軍に入って何處にても高きくさけへるに、特軍ブース大ひに用ひて、之を印度の作戰局に置けり。女史、彼處に到りてより、食を土人と同じくし、足を裸にして熱砂を踏み、晝夜寸暇なく大ひに傳道せしかば、久しからずして身体太だ瘦弱し殆んど死ぬる斗りとなりしが、猶ほ屈らず知友切りに諫むれども休まず、倒れて後ら止まんの決心極めて固く、遂に八年許を過ぜり。此に於て招き還され、一旦歸省して此度び更に我國に來りぬ。其の天笠の酷熱熱砂に曝されし動かさしては、顔やけ、四肢たゞれ、曾は三十路がほどなる今日に於て、一見五十以上の老婦人の如くなるこそ天の勳章なれ。一と度び其の熱信溢るゝが如き演說を聞けるものは、遂に忘るゝを能わずと言へり。

## ◉一箭の微笑

「少年世界」は少女欄を新設せり。一箭のほころぶるも、尙ほ、春の到れるをしめす。

◉三井高保氏の義捐　三井組の西村虎四郎氏は曩に、明治女學校に金五百圓を寄附されしが、今回、三井高保氏より更に金壹千圓を寄附せられたりとぞ。

◉米澤の女學校　與宮に出でゝ喬木に移るの今日、米澤のメソヂスト派女學校は左したる事由もなくして今度閉校となりぬ。尤も惜しむべし。

◉札幌の婦人　基督教徒婦人會、去る十七日開會せられたり。北海道の女界は盛々乎たり。

◉ミス、ベンダー氏　ミス、ベンダー氏は年前に米國より來朝終始青山女學院の校長として女子教育上其功少からず殊に同氏は學力深邃、氣品高尙にして一般内外人の尊重も一方ならず生徒等も深く敬信するよしは竝て聞き及びしが今回一時歸國せらるゝこととなり去月廿三日發の船にて此日の本の山水と訣を別れたり吾人は氏の如き淑女の再び渡來せられんとを切望す」と「同志教育」は記したり。吾儕も亦た謂ひ惜ふ。ベンダー氏のなきは切に其の再來を請ひたき女學士なり。因みに言ふ明治女學校高等科卒業生、松井商瀬女史は米國留學の爲め、同氏に伴はれて洋行せり。

◉一夫一婦と東本願寺法主大谷光瑩氏　な「九州基督教」第八號に摘載したる記事は、去年十月「同志社文學」第七十四號に於て「社會風紀の振肅を論じて敢て東本願寺派に問ふ」と激告せし栢木義圓氏なり。

◉岡井ちか子女史　東行歸朝の後ち太ほだ聞えざりしが、今度本郷區内に於て一女學校を新設せんとす。

◉謝辭　余は女學雜誌の愛讀者なり、其第四十二號に渡邊睦子なる人の和歌を

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

載せたるを見る、石川に流るゝ水はこほろらし今朝は嵐の聲のみぞする、此の一首の和歌が如何に余を感動せしめたるぞ。遂に此によりて慰せしそのスケッチは、默々道人の名によりて、濃飛日報(九月一日)に掲げらる。想像は美を書き現實は望を落すてふ一片の懺悔を告白するにてありけり。

◉高等女學校　札幌、及び、宮崎の二ヶ所に新設せられんとす。

◉宮崎婦人慈善會　台灣遠征兵士の爲に義捐金を募集せられんとす。

◉奥村五百子　曩に朴泳孝に賛りて朝鮮に大養蠶を起さんとせし同女史の計畫も、朴氏の失運と共に中途畫餅となりぬ。更に台灣に向つて望む所ありと言へり、希はくは、一敗、心を失することなかれ。

◉京都婦人手藝會　渡邊清氏の盡力によりて成立せり。其男環氏新たに歸朝し盛んにレース製造を奬勵す。

◉朝鮮婦人留學の爲め來朝す　尹致昊夫人及び令妹。

◉山梨英和女學校の擴張　と題して峽中日報に見ゆるものあり。可賀。

◉函館唯一の女學校　たる遺愛女學校は今回更に幼稚園を設たり。

◉節婦　福岡縣行方郡金房村大字大富渡部辨司氏妻宮澤とめ子(四十一)は金圓及左の賞狀を受たり

　資性温順孝貞友愛克く婦道を守り舅夙に中風を病む五年にして歿す姑尋て又中風に罹る加之夫妹亦幼より黄疸を患ひ業に任へず然るに一身耕耘を勤め能く一家を扶持し侍養看護夙夜惰らず實に十有餘年丹誠一日の如く曾て家産の落たるを慨し益々力を農桑に致し蕩産を收復し一家永續の基礎を成立し其他夫弟の子女を憫み自から援て愛養教育する等孝貞友愛の至情篤く一家を和睦するに至る其篤行洵に奇特なるを以て爲其賞金四圓下賜候事

◉女性詩人　帝國文學云く、最も嚴密なる意義に謂ふ詩人なるものには女性は決して適當なるものにあらず。滿天下の狂へるが爲めコルデリアの星の如き明眸に誰か一滴の露を豫期せむや。よしや、万斛の愁思を絞つて哀を曾根崎蜆川に寄すとも、全人生の大悲觀に悶死せし跡なくんば、女子の涙の特趣的にして從て其の感化の廣からざるを歸納するに難からずとなす(第九號)。

◉女子傳道者　宇宙神教の秘密隊士は、山田寅之助氏の有名なる論文を評して、且日く、根性のネヂケたる歪みたる曲りたる、嫉妬の強き、天然の美人、はた美を備ふることなき衣服の高尚と卑賤とを區別すること能はざる、人に諂媚を捧げて心に猫爪を磨ける、時代の好尚と時勢人情を解する能はざる、柔順の貞德なるを知らずして、執念深き、いやに慢ぶりいやにひがめる、人の美、人の善を猜むの傾ある、道を傳ふるに非ずして却つて此方の欠點彼方の短所を搜し出すが如き傾きある、今日の女子傳道者の多きは其基する所何にあるかを研究せざるべからず(第五卷第一號)。

◉女學雜誌記者の自由派に對する評論　と題して、「宗教」第四十七號が篤實なる答辯を爲せるを讀み、讀んで其意を了す。畢竟、彼我別方面に向つて相論せし也。

◉尾崎行雄　「石巻評論」第四號に婦人問題を論ず、曰く、女子何ぞ必しも男子に劣らん、之を教ゆれば、龍虎となり、之を教へざれば狐狸となる。靜淑は古俗を存し智識は歐米に倣ふ、此の如くして始めて完婦人を得べし。

◉再婚者の高價　ペルシアにては、後家の相場非常に高し。結納の定め大抵左の如きによつて知るべし

　初婚の婦人へは　　一百トコンス(我五百四五十圓)

　再婚の婦人へは　　二百トコンス(我一千圓餘)

こは縁づく度に家政に慣れ、要たる道に經驗を重ぬると思はるる故なりとぞ(商業資料、第三卷第三號)。

◉匈牙利國幼兒の教育　匈牙利國文部省第二十二學年報(千八百九十三年調)に依れば同國に於て齡三歲より五歲までの幼兒を預る所は之を三種に別てり第一種は通常の幼兒寄托所にして其數七百七十一あり第二種は養育院にして其の數五十四あり第三種は夏季養育院にして其の數四百三十一あり而して第二第三の兩種は孤兒或は兩親死せずとも故ありて之と別れたるもののみを入院せしむる爲に設けたるなり右三種養育所に預かれる幼兒數は男女合せて百三萬二千六百四十九人にして匈牙利語の外七個國の語を使用すといふ此等幼兒を取扱ふ男女は孰れも訓練を受け免許狀を有するものにして之を訓練するが爲には六十六人の教授及び教員ありと云ふ(百六十七號大日本教育會雜誌)



Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

# 特得妙技 音樂家治療の公告

樂手は天成にして造りがたし。美音は造る可らず生れざる可らずと言ふものもありと雖ど、若し天の則に隨ひて巧妙の治療を施こす時は、彈指、御使の如く自由に飛び、發音、天の音樂の如く美妙とならんと驚歎の外なし。野生多年醫を業とし、博士エルドリッチ氏と同もに多種の治療に從事せしうち、偶々音樂者の爲めに施こすべき一種巧妙の治療術を特得し、久しく之を試みて着々効驗を奏せしにより、玆に初めて世上に公告して、有志の需めに應ず。

第一　樂手彈指の治療

奏樂者第一の辛苦は、彈指の伸張りて自由ならぬとにあり。就中、西洋のピアノ、ヲルガンは西洋人の爲めに適應せしめて、一オクタブの距離遠ければ、指の餘りに長からぬ本邦樂手の爲めに不自由の事多し。余は、之が爲めに一種の治療を施し、指を長くし、伸張りを和らしむるの妙術を行ふべし。

第二　發音聲器の治療

音聲の最とも肝はしきものは人の聲音なり。聲音美ならずば、奏樂ありと雖ども、妙の過半を失なはん。余は、耳、鼻、口、喉の四科に一種の治療を施こし、所云る音樂の耳を訓へ、且つ、美聲發音の源を清くすべし。泉源主を崩ずるもの自からにして流るるに至らんと必せん。

有ゆ一種の治療に於て有志者の需めに應ず


横濱チヤリチイ病院々長
横濱フェリス女學校々醫
生理衛生學講師
**六角謙吉**
診察所　横濱瑞町卅六番地
（電話　三百番）

日本宗教界評論之評論

# 日本宗教

THE REVIEW OF RELIGIOUS REVIEWS.

## 日本宗教第三號目錄

肖像
臨濟宗圓覺寺派管長釋宗演師及其小傳
神道實行派管長柴田禮一氏及其小傳

社説
厭世と樂天……一四一頁

論説
戰後の神道　柴田禮一……一四六
讀加藤博士之殺生戒　安立洞順……一四八

史傳
山崎闇齋(其下、教化)　白川殘花……一五〇
聖德太子憲法釋義　島田蕃根……一五三

雜纂
釋宗演禪師を訪ふの記　殘花生……一五九

和歌に於ける宗教(下)　湯谷紫苑……一六三
亞細亞的宗教觀(下)……一六六
囬朝子に聞く……一六九

思潮
佛教の大悲博愛平等觀　雲照律師……一七三
不生不滅　林[illegible]永氏……一七三
教育家としての聖書　ノースロップ氏……一七四
禪學實究　禪學……一七五
積極的傳道　四明餘霞社説……一七五
人情的基督教　東洋基督教社説……一七六
諸佛不動智　四明餘霞宗要……一七六
迷信とは何ぞや　福音新報社説……一七七
禪學の効果　禪學社説……一七七
宗教衰微の原因　澤田和民氏……一七八
眞言の哲學　井上圓了氏……一七九
宗教改革の聲……一八〇
禪の流行に就て……一八五
比較宗教學の研究……一八八
神戸の宗教　吉川老川氏……一八九
密宗哲理の研究　明教新誌社説……一八九
基督教の情勢を論ず　澤柳政太郎氏……一九〇
善光寺　加藤咄堂氏……一九一
迷信の流行　福音新教社説……一九一
日蓮宗各派合同の時機　比丘森川氏……一九二
平僧と禪機　禪學……一九三
宗教と併呑手段　辰巳小次郎氏……一九三

基督教界一種の傾向　基督教新聞社説……一九三
佛家今日の急務　足立栗園氏……一九四
日本佛教各派の形勢　四明餘霞……一九四

新著批評……一九五
佛教最近の敵。心鏡。天橋王羅祭。澤柳十一教育。

雜誌評論……一九六
反省雜誌。禪宗。傳教。教友雜誌。密嚴教報。十善寶窟。正法輪。四明餘霞。傳燈。明教新誌。同學。佛教史林。三寶叢誌。救世の光。惟一。大悟叢誌。まこと。眞理。宇宙新教。宗教。六合雜誌。正教新報。救世。基督教新聞。教界評論。福音新報。ジャパン、エバンゼリスト。

雜誌目錄……二〇一
新刊雜誌四十餘種

時流……二〇三
日本宗教界。海外宗教界。

佛教各宗派一覽

定價　一冊八錢郵税一錢。半年前金郵税共四十六錢。○見本所望の仁は郵券九錢封入申込あれ。郵券代用一割增。爲替は東京麹町郵便局宛

發賣所　東京麹町區下六番町六番地　(日本宗教社)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

# 女學雜誌社出版書籍

| 書名 | 著者 | 一部代金 | 郵税 |
|---|---|---|---|
| (再版)小公子 | 若松賤子譯 | 一冊廿八錢 | 八錢 |
| (六版)百人一首講義 | 鈴木弘恭君講 | 同廿五錢 | 同四錢 |
| (信神孝父)腓立比物語 | 櫻井成明君譯 | 同廿八錢 | 同六錢 |
| (讀さき)猫と鼠 | 女學雜誌社編 | 同四錢 | 同二錢 |
| 吾黨の女子教育 | 巖本善治君著 | 同八錢 | 同 |
| 木村鐙子小傳 | 同前 | 同八錢 | 同 |
| 公娼可減 | 同前 | 同三錢 | 同 |
| 教育講義 | 同前 | 同七錢 | 同 |
| 日本女學 | 同前 | 同四錢 | 同 |
| (再版)文法口授 | 鈴木弘恭君述 | 同十二錢 | 同 |
| 婚姻論 | 黄山雅男君著 | 同十二錢 | 同四錢 |
| 產婦小兒攝生法 | 船越駢太郎君著 | 同八錢 | 同二錢 |
| 邦文學 | 松山高吉君著 | 同十二錢 | 同四錢 |
| 俳諧史傳 | 小此木信六郎 布川孫市 兩君同著 | 同廿七錢 | 同 |
| 善惡の岐 | 中島とし子著 | 同十七錢 | 同 |
| 廢娼演說 | 島田三郎 植木枝盛 君同著 | 同三錢 | 同二錢 |
| 西洋女禮 | 本社著 | 同十錢 | 同 |
| 小供の話 | 同 | 同四錢 | 同 |
| 兒育草 | 同 | 同十二錢 | 同 |
| 藝者と手掛 | 炭谷小梅女著 | 同二錢 | 同 |
| (戲曲)桂吾郎 | 阿波鳴門左衛門著 | 同十錢 | 同 |
| 高橋傳五郎 | 巖本善治君編輯 | 同五錢 | 同 |
| 偉人物 | 山月子稿 | 同二錢 | 同 |

發行所 女學雜誌社

# 本社取次書籍

| 書名 | 一部代價 | 郵税 |
|---|---|---|
| 西鄉隆盛傳 | 卷一ヨリ卷五迄五冊 壹圓三十五錢 | 一冊六錢宛 |
| 救急看護法 | 三十五錢 | 二錢 |
| 普通看病學 | 三十五錢 | 二錢 |
| きやうと | 二冊八十錢 | 十錢 |
| 祝ひ歌 | 十錢 | 二錢 |

## 日本宗教大取次

哲學書院◎警醒社◎好明館
東京堂◎女學雜誌社

## 女學雜誌定價表

| | |
|---|---|
| 前金 | 壹冊 金拾錢<br>一年前金 金壹圓 (無郵税) |
| 廣告料 | 一行 一回 (廿七字詰) 前金十錢<br>同 三回以上 一割引<br>同 六回以上 二割引<br>○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。<br>但し不適當なる廣告は謝絶す。○寄書の廣告は社員の上無代價にて引受く |
| 送金 | 爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割増を添ゆべし |
| 注文 | 注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし |

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年九月廿四日印刷
明治廿八年九月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

(明治廿五年三月十五日遞信省認可)

# 女學雜誌社出版書籍

| 書名 | 著者 | 一部代金 | 郵税 |
|---|---|---|---|
| (再版)小公子 | 若松賤子譯 | 一冊廿八錢 | 郵税八錢 |
| (六版)百人一首講義 | 鈴木弘恭君講 | 同廿五錢 | 同四錢 |
| (信仰孝父)腓立比物語 | 櫻井成明君譯 | 同廿八錢 | 同六錢 |
| (讀きき)猫と鼠 | 女學雜誌社編 | 同四錢 | 同二錢 |
| 吾黨の女子教育 | 巖本善治君著 | 同八錢 | 同 |
| 木村鐙子小傳 | 同前 | 同八錢 | 同 |
| 公娼可滅 | 同前 | 同三錢 | 同 |
| 教育講義 | 同前 | 同七錢 | 同 |
| 日本女學 | 同前 | 同四錢 | 同 |
| (再版)文法口授 | 鈴木弘恭君述 | 同十二錢 | 同 |
| 婚姻論 | 黄山雅男君著 | 同十二錢 | 同四錢 |
| 産婦小兒攝生法 | 船越駢太郎君著 | 同八錢 | 同二錢 |
| 邦文學 | 松山高吉君著 | 同十二錢 | 同四錢 |
| 俳諧史傳 | 小此木信一郎 布川孫市 兩君同著 | 同廿七錢 | |
| 善惡の岐 | 中島とし子著 | 同十七錢 | 同 |
| 廢娼演說 | 島田三郎 植木枝盛 兩君同著 | 同三錢 | 同二錢 |
| 西洋女禮 | 本社著 | 同十錢 | 同 |
| 小供の話 | 同 | 同四錢 | 同 |
| 兒育草 | 同 | 同十二錢 | 同 |
| 藝者と手掛 | 炭谷小梅女著 | 同二錢 | 同 |
| (戲曲)桂吾郎 | 阿波鳴門左衛門著 | 同十錢 | 同 |
| 高橋傳五郎 | 巖本善治君編輯 | 同五錢 | 同 |
| 偉人物 | 山月子稿 | 同二錢 | 同 |

發行所 女學雜誌社

# 本社取次書籍

| 書名 | 一部代價 | 郵税 |
|---|---|---|
| 西鄉隆盛傳 | 卷一ヨリ卷五迄五冊 壹圓三十五錢 | 一冊六錢宛 |
| 救急看護法 | 三十五錢 | 二錢 |
| 普通看病學 | 三十五錢 | 二錢 |
| きやうと | 二冊八十錢 | 十錢 |
| 祝ひ歌 | 十錢 | 二錢 |

## 日本宗教大取次

哲學書院◎警醒社◎好明館

東京堂◎女學雜誌社

## 女學雜誌定價表

| | |
|---|---|
| 前金 | 壹冊定價 金拾錢<br>一年前金 金壹圓<br>(無郵税) |
| 廣告料 | 一行 一回 (廿七字詰) 前金十錢<br>同 三回以上 一割引<br>同 六回以上 二割引<br>○十行以上一割引。○二十行以上二割引。○四十行以上四割引。<br>但し不道德なる廣告は謝絶す。慈善の廣告は社議の上無代價にて引受く |
| 送金 | 爲替は東京麴町郵便局に宛て小爲替にすべし○郵便切手にて送る人は五厘切手にて且つ一割增を添ゆべし |
| 注文 | 注文は東京麴町區下六番町六番地女學雜誌社あてに申越さるべし |

明治廿七年十一月十四日內務省許可
明治廿八年九月廿四日印刷
明治廿八年九月廿五日發行

發行兼編輯者 東京市麴町區下六番町六番地 巖本善治
印刷者 東京市牛込區市谷加賀町一丁目廿三番地 根岸高光
發行所 東京市麴町區下六番町六番地 女學雜誌社
印刷所 東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地 株式會社秀英舍第一工場 (電話十九番)